增補雅言集覽

三十三

K7

813.6
I619g
Wn8

813.6
I619g
Nxd

国立国会図書館
41.3.31

691349

增補雅言集覽卷之卅三

石川雅望 集
中島廣足 補

○於の部

おめ（弁内侍）やり水ゝ落入てもべりゝをおめさる鬼とて人々わらいせ給ふ（保元物語）御邊程の大將軍の夢物語おそおめたれ云々其上武將の身とゝて夢見物忌などあまりにおめさり（平治物語）弓矢とる身の何條さるおめたる事やある（沙石集）一上人信ぜゞゝ神通なんぞを現ゝてそせよゝゝ誓狀こそむゞゝおめたれといひれば（めのとのさうゝ）おめぎさゝいたそゆる〳〵とうちゝ給ひて（沙石集）三下十六弟子の僧火たきてまへの爐ゝて生たる魚をゝるゝ鍋のゆのあつくなるまゝゝ魚をびつゝをどりおつ愛弟の兒是をとりて手水桶の水ゝすゝぎて鍋ゝいる房主是をみてよゝ〳〵よくゝさり兒どもゝそれ体ゝおめぬるぞよきといふ

おめ〳〵（保元物語）京師本いろゞとり給ひぬと云けれゞ景茂おめ〳〵と成て（沙石集）五下八返事にもおよゞてさておめ〳〵とうまより下りてぐゝてまゐりぬ（盛衰）十八ノ十一烏ゞうゝもとらぎもとゞりもおちおめ〳〵ともひ起て（著聞）十ノ十七引も

なつべくもあらねバ力及ハぎーておめ〳〵と女の行ヨーさゞひて行ヨ

補 おめく（著聞）二十、卅九 さゝくおめく聲人のでとー（枕）四十 うち見るヨあハせておめけバ云々（宇治拾）二、廿 ひとぎありて人ところをやとおめく（同）同廿一 おめき候つる聲ヨつきて人々いでまうできつれバ（同）同三十 おめきさけびあひたり（同）同二十 あらあつやゝとおめきいりくるめく事おびさゝー

おー（拾）物名 すけみ 「むーさゝのおきゐにせんとかまへたるおーあゆゝにかねぎみとるべく

補 おー。警蹕ノ聲ナリ（五十音義訣）二侍中群要三巻供御事の條ヨ初供御膳人先取蓋盤入立鬼間御障子之間稱警蹕其詞オシ持寄御大盤許跪云々と有るヨ按ひ合せて所知さり○其詞ニオシと有るハ乃阿知女法なる於々志々なり此ハ今も貴人の警蹕に云言なり禁中の警蹕の事をべて此書ヨ委く見えたり和訓栞ヨをゝの下ヨ警蹕もとゝと呼ふ事なり侍中群要ヨ稱警蹕其詞をんと見ゆ云々とて天竺の唵聲のこと朝鮮の清道と書たる旗の事など云出さるハ皆非なり殊に已ゝ見たる侍中群要の本どもヨ其詞をんと作る本ハ一本ゞヨあきものをや○尚云ハゝ枕草子いへハの條ヨ「日のおまーの方におものの參る足おと高〳〵警蹕なゞ遠々志々と云ふ聲きあゆと云へるも

此事あり於々と云ひ志々と云べきを約めて於志と一言ヨ云へるなゞ遠志のをハ中世書の例の假字違ひなり○春曙抄ヨを〳〵ハ足おとの高きを警むるなり源氏宿木巻の注ヨ空穗物語にをーと云へる詞ありをハ物などまるらをるヨ人の足音の高きを恐れよと云へる心なり禁秘抄ヨ陪膳人警候とある心ヨやと有るハ然る言なり然るを谷川の日本紀通證六巻水取政の事をいふ所に此等の文を引きて於志と云ふを天忍石水の事ヨかけて水を飲む時の祝言とゝ〳〵今人有咽則祝云於志麻奴亦忍水之轉訛也とも云へるハ甚ーき誣會の說なり春曙抄ヨ恐れよと云へる心なりと云へる如く今も兒の教へを用ぬ時など物有趣ヨ覺言ーて於々於々と云ふも實に同ド意をへなり昔もなゝ有ーにや古き化物の繪巻本ヨおう〳〵と云ふ化物の形をも畫けり然て志々と云ハ人をも物をも追靜むる詞なり○是警蹕の聲の於々ある由ハ衣笠内大臣家良公の淺深秘抄ヨ稱唯時塞口警蹕時開口也また警蹕伏ザマヨ稱也稱唯起ザマヨ稱也とあり和訓栞にまさ此文を引きて警蹕而後平伏とあるハ甚く相違の文あり何なる事ヨゝ○稱唯ハ袁々と唱へて合音なる故ヨ塞口と宣ひ警蹕ハ於々と稱へて開音なる故ヨ開口と宣へるなり○諸の儀式書まさ神樂次第などヨ稱唯と云こと數知らぎ多ゝる中にオヽト假字を指さるゞ多きハ皆右の故實を知ざる人の誤

かり○また警蹕い畏むべき由を示に聲ある故ゑ伏さまを稱ー稱唯い令せを承給い
り荅ふる聲ある故ゑ起さまゑ稱をる也

おーいで（源うつ蟬）九君をおーいで奉る（同椎ゥもと）四十二あらいにもあそあれそ
の御木丁おー出ーてこそと

おーろい○ふるくいーろいものといへり［い］の部ゑ出に（四季物語）五月空のけー
きよべをーゑりいりて花田の紙ゑおーろい付さる

補 おーはる（新拾）誹諧實方「おーむりて弓の袋とーる〳〵やおもいぬ山のものをい
るらん（源とこ夏）十九。近江君をざれさりくおーむりて五せちのきみとてざれさる
わゥ人のあるとをぞろくをぞうち給ふ

おーいゥり（源竹川）三とー月をおーむゥらせ給ひて（同夕きり）六十此人をひきたて
ておーむゥりに入給ふ（宇治拾）十、十五除目の朝ゑ此大君のおーむゥりでとゑいふこ
といつゆたがいねぞ（源帚木）五それーゥあらドとそらゑいゥゞいおーむゥり思ひ
くたさん（同朝ぅは）四あやーき御おーむゥりゑなんと（同夕ぅは）廿八瀧口のとのゐ
まうーいまこそとおーはゥり給ふいまざいたうふけぬゑこそと（同わゥ紫）四十五女
の心ゥいーけることゝおーむゥられぬべくいよのつねあり

おーむりでと（源みもき）初南の上の御おーむりでとにかあひて

おーむなつ（源あけまき）七十九はーたなくもえおーむなち給いぞ

補 おーへぐ 押片（枕）十一、廿五有明の月のくまなきゑいとドうそゥーかねあどおーへ
ぎたるやうあるゑ

補 おーへに（枕）二ノ十四あるえびぞめあどのさいでのおーへされてさうーのなゥゑ
ありけるを見つれたる

おーとゞむ（源匂宮）十六おーとゞめさせて

おーとらる（詞花）雜下親の所分をゆるなく人ゑおーとられ

おーをる（源あふひ）七ーぢなどもみなおーをられてをぞろある車のどうにうちゥ
けたれば

おーわぐを（空穗くら開）下、十二五此女前なる硯に手習をーてかくこのきつく云々おーわ
ぐをておいたる（同あて宮）廿一文をちひさくおーをぐをて

おーわけ（源まき柱）四十一此近江君人々の中をおーわけて出給ふ

おーゥへー（蜻蛉日記）上命いあらせてわゞ思ふやうゑおーゥへー物をおもいせを
やとおもひーを（源澪くも）卅七おーゥへーうらを給ふ 補（新古）雜下攝政太政大臣「おーゥへ

ー物をおもふいくるーきまーらぜがゐまて世をや過まー(山家)下「うき世とも」おもひとゐさドおーりへー月のそそける久りさのそら

おーりへーて(榮見てぬ夢)八此四月の祭の使まに出給ひーりびよろづまーさてさせ給ひておーりへーてあやーの御車まて御らんドて補(濵松)一上おーりへーて人をつりいーたれば

おーかゝる(源あふひ)廿二勾欄まおーかゝりて霜がれの前栽見給ふ(同やどり木)十七あげーにおーかゝりておもすれば

おーりら(宇治拾)七八心ぜへかーこく肝ふとくおーりらたちてなんおいーれる(今昔)廿八肝ふとくおーりらまおん(續古支談)二白川院御所にて爲隆事を奏ーけるまに題目ことの外まかさなりてうるさりまに覺ーめーたりけるを此次(ツイ)で申文のあるかぎり奏ーもてんと思ひてーらぜ顔にて申ゐさりけるまに申文今五六通をりりまおりて院たちておいーまさんとーけるを爲隆みぜ顔まて大中臣某謹申請天裁事とよみきりせ參らせたりれば大神宮の訴よなとて歸りゐさせ給ひまけりそれを力まてのこりをも申もてゝぞ出まけるをべてりやうまおーりらありてゆゝーおりれる人なり

補

おーかくる(宇治拾)一利仁狐をおーかくればきつね身をなげてまぐ。馬ヨリ追カク

おーよせ(源末つむ)廿四脇そくをおーよせて

おーさち(源帚木)四十一かくおーたち給へるを情なくうーと思ひいりさるさま(同桐つぼ)十八いとおーたちかぜ〳〵ーき所物ー給ふ御方まてとまもあらぜおぞーけちてもておーー給ふなるべー(同末つむ)十五おーさちてあむ〳〵ーき御ふるまひいよもなぞいとよくいひなーて(同わかな)上十二いミドき人と聞ゆともさちならびておーさち給ふ事いえあらド(同あけまき)六十六左のおほいとのゝ六の君とうけひかぜおぞーたりーー事なればおーたちて參らせ給ふべー補(源夕きり)六十あがきみとかくおーたちてひさふるなる御あゝろあつりもせ給そ

おーたゝむ(源野わき)三御屏風もかせのいたうふきければおーさゝみよせたるまに(同紅梅)十紅梅の紙まわりやぎかきて此君のふところ紙まとりませおーさゝみて

補

おーさふを(枕)十二十四たちるぬりづきたるわおーもたふーつべき心ちこそそれ

おーさてゝ(空穗藏開)上八十八まりで給ふまゝまに御つりさの人まちうけ奉りておーたてゝあそびてとのまおむす(源あのし)廿一情なうおーたゝんもあとのさまるさゞへ

り心くらべよまけんこそ人わるゐれ

補 おーつゝむ（源とこ夏）十一 おーつゝみて出ーつ

おーつけて（玉葉）雑三 位におまーくけるる時大納言の三位きぬをぬぎ置て局へおりよけるゞ夕立のもりていさくぬれてむべりけれゞからぎぬの袖よおーつゐて給ゝせゐる

おーあをを（源帚木）九 おあドくいわゞちらいりおーあほーひきつくろふべきところあく

おーなべ（源桐つぼ）卅一 御かさゞーの人々世中よおーあべたらぬをえりとゝのへをぐりてさふらゝせ給ふ（同帚木）四 おーあべたる大方のゝ數ならねどほどくよつけてゝきかむーつゝも見むべりあん（同）卅二 おーなべたらぬわゝ人どもよ（拾）夏 長能

「さむへあゐあらふる神もおーあべてれふゝあでーのむらへなりれり（源夕ぎのほ）五げよ思へゞおーあべさらぬ人の御をくせぞゝーと（同わゝの紫）廿五 おーあべたらぬ心さーのほどを御覽ドゝらゞ補（源わゝのあ）百六 さるゝ世よおーあべさらぬ人の御おをえと（万）一、廿一 「むたをゝきーのをおーなべ草まくらたびやどりせゐいよーへおもひて（續千）春上 深養父 「おーあべていざ春のゝまドりあんわゝあつをくる人もあふやと（万）十七、四十八 「めひの野のをゝきおーなべふるゆきよやどりるれふーゝなーくおもをゆ

おーあぶる（蜻蛉日記）下、中 さきよやけにーよくき所てさびゝおーあぶるありけり

おーあを（新古）旅 經信 「旅ねーてありつき方の鹿の音よいあをおーあを秋風ぞふく

補（玉葉）秋上、入道前太政大臣 「小山田のいあをおーあを吹風よほをををつさふ秋のーら露（夫、十六 好忠 「いとむやもふーでゝけて祈こーいげきおーあをおけるーもゝあ

おーあー（大和物）六 此子をおーあーさうひける大とくゝこゝろよもあらでなりたれゞ親よも似ぞ京よもかよひてあんーありきける

おーうつり（榮 見てぬ夢）卅一 かの内大臣殿よゝあさまーうとこがまーゝりつる御有さまのおーうつりたりー程を人笑れよゝれよゝをゝうねさゞありつるよ（同）卅四 此内大臣殿ゝ粟田殿の云々世中さあげらおーうつりよさり

おーうでゝを（源朝ぎのほ）廿一 ゆきまろゞーせさせ給ふ云々いとおゐうまろゞさんと云々えもおーうでゝさでわぶめり 鳴

おーのれ（詞花）雑上 ーのびさる男のありれるきぬをゝーがまーとておーのれゝれゞ（万代）雑三 俊頼 「いゝざーよあふ杣川のををづくーおーのれられて過るころゝあ

おーのこひ（源夕顔）五おーのでひ給へる御袖のほほひもいと所せきまでちりそりそちたるに

おーくたす（源紅葉賀）十八平調ほおーくたーゝらべ給ふ（同夕きり）廿三あーのけのゝゞりさるあゝちをとおーくたさせ給ふ

おーくゝみ（金葉）雑下大路ほ子をすてゝむべりけるおーくゝみほ書つけむべりけるうさ（源夕のは）卅三うゝむーろほおーくゝをて（同わの紫）卅九ひとへぞりをおーくくをて（榮きるいわひし）一うせさせ給ひぬれば云々御ぞほおーくゝみてゐておろーー奉らせ給ふ（職人歌合）右、タ、ミ、サシ月「山のもほいざよふ雲のおーくゝを月ほへりある秋の夕ぐれ

おーやる（源帚木）卅九うへの衣おーやるまでもとめつる人と思へり（同うつ蟬）八きぬをおーやりてより給へる（源あふひ）七人たまひのおくにおーやらて（同さのき）卅四紅葉の枝をかめあさゝせてひさーのむーらのもとほおーやらせ給ひつ

おーまく（源わのあ）下八十一あさをどりのうをやうある文のおーまきたるむーみゐるを（同はし姫）四十一さゝやうほおーまきあむせたるほぐどもの（同あけまき）六十八いかある繪ほうとおゞをにおーまきよせて御前ほさーいれ給へるを

おーけち（源竹川）卅七おとゞおむせまーうゞおーれち給ゝざらまー

おーけたる（源あふひ）八おーけたれさる有さまおよなうおゞさる（同）同上達部ゝいとゞことあるを一所の御光りほおーけされさめり

おーまりて（源あふひ）四十女房三十人をりおーこりて（枕）五九宮の御方の女房廿人をりおーまりてあとゞーーういひたる藏人何とゐせぞ戸をおーあけてざゞめきいれば（同）十ノ廿七おーこりてまどひのり果て出て補（榮月の宴）あつまりてあふぎをさーうくーつゝおーこりてをあるあをて。女房達ナリ（同とつ花）ものくるほーういくへとゐーらぬまできせたる十廿人二三十人おーこりてわされば（蜻蛉日記）下下、あうき人くろき人おーまりてうをゐーらぬほどほさてりけり

おーこめて（狹）四ノ中四十二さゞかたをほおーこめて谷のうゐれ木あてぞ過ーー給ひける（源夕きり）卅五いとわりあくおーこめての給ふ（同藤はのま）十二たゞすくよりほ聞えあーー給ふまばゐくておーこめさるゝくるー

おーて印（續詞花）「けふひらくたうらの箱ぢおーてこそほーへ行べきをるーありけれ（三代實錄）一、五神璽寶劔鈴印等補（天）十三清輔「久方の天のおーてやこれあらむ秋のあるーと見ゆる月うゞ（万代）秋上俊賴「さあをさゝあめのおーてのやへぎりほ道ふ

こまどへ又やりへると(同)神祇清輔「神代より天のおーての動おき印にたてーいたや山哉

おーて(源紅こい)八ひたゝおーー手ーづやりおるをよきまをる物おるまちゆうさに柱ほど

おーて(古)春上、よみ人しらず「あづさ弓おーてたるさめけふゝりぬあをさへふらばわりおつこてん(長明發心集)六ノ十五よびりへーて單をおん一つおーいたーたり慌て取ていぬと思ふほどに同寺まに奉納する所まに行て硯こひていとうつくーきてまて此うたをりきつけたる「りのきーにこぎたあれたるあまあればおーてつくべき浦もゝさらぢ(源玉葛)八おーて此國まこえきぬ

おーてる(古事記)おーてるやおまたの崎ゆ立出て(万)三、五長歌十一おやきこのこと りーおみおーてるやおまたのくまゝ(同)六ノ廿六「たゝこえの此道にーておーてるやおにいの海となづけゝらーも補(万)廿ノ廿六長歌難波のうこおーてる宮にきこめをおへ(同)同おーてるや難波の津より云々

おーあたせ(源梅のえ)十御方〳〵の女房おー合せたるかぢーらぢこえたり(千載)序りれおれおー合せてこそぢあまりこりへりの春秋まおんなりまけるおーあは(源夕顔)初りどいおとこのやうおるをおーあけたる(同)三此おーあはさる門まに入てをる(同あのし)卅月いれさる槇の戸口けーきをりおーあはさり(同玉のつら)廿一けどやくへざてつる屏風たつもの名でりおくおーあはて

おーあて(源みのり)十五御袖を顔におーあて給へるほど大将の君も(同うき舟)六十五此御文を顔まおーあてゝおぢーいつゝめども

おーあてに(源わの紫)十三まめやりまきこめるをおーあてにの給へば(狹)一、二十四やげておーあてにおいーまーて(源花の宴)十四おまに故りとおーあてまの給ふ(狹衣)一ノ五四十五

おーあゆ(土佐日記)元日云々さゞおーあゆの口をのこをふ(保憲女集)おーあゆの口をうつくーこ補(拾)物名「もーたりのおきるませんとりまへたるおーあゆりを御鼠とるべく

おーゆづる(源うす雲)廿五万の事おーゆづり聞えてこそいとまもありつるを

おーおづめ(源をとめ)廿一おとゞのーひて女御をおーおづめ給ふもつらきに補(源とこ夏)廿四おとなるゆるおあきことをものぞやりまおーゝづめていひいざーたるゝ

おーひさー(源東や)四十おそろーき夢のさめさるまゝちーて汗まおーひたーてふー

給へり

おーひさすら（夫）卅六 俊成「つらさにもおちー涙の今ハたゞおーひたもらまこひーゝるらん（後拾）戀四 和泉式部「さまゞーまに思ふこゝろハあるものをおーひさすらまぬるゝ袖ゝか

おーひらく（繼躰紀）八ひの板戸をおーひらき

おーひらめ（つれ〳〵）五十三段鼻をおーひらめてゝをさー入て

おーひーく（枕）九九蓬の車まおーひーゞれたるがわのまひさちたるまちゝうかゝへさる香もいとをゝー（同）九ノ十二おひのけられたるえせ車ども牛ゝけて所あるゝさまゆるゞーもてゆくなどいとわびーゞなりきら〳〵ーきおどをゞえさーもおーひーゞぞゝー

補 おーもむ（源とこ夏）十九手をいとせちにおーもえて

補 おーもる（源夕きり）卅一をゞりおーもりて

補 おひ（宇治拾）一いゝゞせんとおもひて貧うちおろーて内まに入てけり

おひいで 生出（狭）三上ねぢけゞまーきおひ出おどをいとめやをき事ともいそぎおほーめされける（源桐つぼ）十七わゝゝやなどおひ出給ハゞさるべきついでもありおん（同）廿四きさいの宮の姫宮こそいとようおゞえておひ出させ給へりけれ（同夕このは）四十五西の京まておひ出給ハんハ心ぐるーう（同あけまき）廿八さゞ人に遠くておひ出させ給ふめれば

おひむゞむ（源こてふ）十八「今さらまいゝあらん世ゝわゝ竹のおひむゞめけんねぞたづねん

おひもらふ（源松風）廿いとよそほーくさーあゆゝ給ふほどゝーゞまーうおひもらひて

補（源うき舟）四十九國のうちもおひもらもれぬ

おひとゝのふる（源玉葛）八廿ぞゝりまあり給ふまゝまおひとゝのふりていとあさらーく

補 おびとりゝハ 帶取革（續後拾）物名太刀の帶とりゝハ

おひわゝる（源こてふ）十七「ませのうちまねふゝく植ー竹の子のおのゞよゝにやおひゐゝるべき

おひゝもる（拾）戀二忠房女「久ーくもおもはえねども住吉の松やふたゝびおひのもるらん（新古）神祇、住吉の御歌「いゝはゝり年ハへねども住の江の松ぞふさゝびおひゝハりぬる

おひらへい（源手習）十けゞらひたる人とて立かゞらおひらへーつ

おひらせ　追風（源わこの紫）十君の御追風いとことあれば（千載）秋下、道命法師「みなと川よ舟こぎ出る追風は鹿の聲さへさえさるあり（同）夏家基「浮ぐものいざよふ宵の村雨におひ風ーるくはほふたち花（後）雜二、よみ人しらす「なはいかたこぎいの蘆の追らせはうらこてぞふる人のこゝろを補（新後拾）春下御製「山人のらへるつま木のおひ風はつもれどらろき花のーらゆき（同）旅、よみ人しらす「あむぢゞさせとの追風吹そひてやゞてかるとはかゝるふか人（後）戀三兼覽王「今いとて行らへりぬる聲からばおひ風はても聞えまーやハ（行宗卿集）「おひ風はとゞちの里のらころもさゞやどちらくうつ聲ぞする（玉葉）雜三定家「鐘のおとを松にふきーくおひ風はつま木やおもき歸るやま人（續千）旅爲世「今朝ハこかまゞはぞらくるおひ風の吹一らたは出るとも舟（狹衣）三、下さとにはひ入たるおひ風もまきるべうもあらぬは（伊勢集）「おひ風の我やどはーも吹てまいるかゞらそらの花を見まーや「おひ風は風ハかはりて吹ぬともあまのいらりはとゞまりやせん（源花ちる里）三おゞきかるらつらのおひらせはまつりのころおゞーいでられて（同朝のは）六こ木丁のをきらげ哀はおひ風かまめらーく吹とゞー（同匂みや）十あたりとゞく隔さるゞどのおひ風もまことは百ぶの外もらをりぬべきこゝちーれる

○補　おひてのらせ　追手の風（夫）十九知家「をゞーともいふらひぞかき沖らけておひてのの風にいづる舟人

おびたゞーく（狹）廿二、上。廿一大將此年頃さまゝ〳〵は思ひかぐさむよあうなげき過ーつる有さまかどをおびたゞーらぬ物らら少ーづゝもらー出給へるはーきかどいと忍びらさゆは（空穗吹上）八らんゞやうつゞみ物のねひとさびに打ふきひきあもせたりおびたゞーくめでたー（宇治拾）十三、二あまさはうりえておびたゞーき德人はかりぬれば（發心集）三、九事いををべき頃をもわらぜ泪をおさへつゝあらーくらはと人目もおびたゞーく（堀百）「おどろらぬ人ハあらゞか曉のあられの音のおびたゝーきは（宇治拾）十ノ十八陰陽師を具ーてそれゞ家はいきて門をおびさゞーくさゝきければ（同）五、二十たゞ寂心そころせといひてとりつきてかく事おびたゞー（同）八、二武正あらゝうのかをーもは簑笠をきて簑の上は繩を帶はーてひゞさの上を又おとゞひは繩はてからげつはてのせ杖をつきて走まもりて行ふかりけり大方其姿おびたゞーくにるべき物かーー補（著聞）十六、廿六おびさゞーきものをくもかくねもとまてつき入けり（同）十八おびさゞーく肥ふとりて（同）あかおびさゞーや（同）廿やゞてもれていく

ほどもなくおびさゞしき瘡に成ぬけり（同）廿おめきいりくるめくことおびたゞ
（とりゝへたや）一ーろくおびたゞーくあたてたるいとけうとりけり（顯輔集）
國司のれういことおびたゞーくおゐきにて（散木）「夕顔のーげをまをたくゝつ
ゞ虫おびたゞーくも戀さけぶゝか（同）「たゝみおゐるいたまを過るあをさ川おび
たゞーくもたぎるかるゝか（同）今日かくおびたゞーくゝもまうでなどのやうに
（同）「五月雨いなつゝーゝりー水のおとのおびたゞーくもありまさるゝか（山家）
「ものゝふのからにをさびいおびさゞーありそのーさりかもの入くひ

おひさつ（源夕ゝは）五十かのかぜーこのおひたつありさまきゝせまほーけれど（同
若紫）十おひたらんありゝもーらぬわゝ草を（同こてふ）十七お前ちゝきくれたゐのい
とわゝやゝまおひたちて

おびれ（濵松）四、四十一いとあてまおゐどゝまおびれたるさまかゞらうゝーく匂ひ
おゐゝるかたなんおくれぞ（源朝ゝは）廿二やいらゝまおびれたる物ゝらふゝうよー
づきさる所のからびかくものー給ひーを（狹）三、五、廿今姫君（前アリシ歌ヲ）まれゝ思ひ出て
いさうおびれーとけかき聲ゐて「よーの川何ゝいわたると一もゞもたゞへぞいひ
出給へるを（同）廿二只おびれて打里びれ給へるまこそいと思ひつるをいと殊の外ま

おいーけるゝか（源わこのか）下ノ九十女御のあまりやいらゝまおびれ給へるこそ。おび
れいをさかき心なり寐おびれなどやうかり補（源よこ笛）十三君たちのいとけかくね
おびれたるけもひかぞ

おひつきて（狹）三、上廿九母代宰相中將ニおひつきて袖をひゝへてたそ名のりせよさら
ぞいい天下まを出ーやらでからきめを見せんと云々（後）雜二いまかん行過ぬると人のつ
げ侍ければおひてつゝもーける（伊勢集）二から坂のわたりまぞおひつきておこせ
さりける補（古本今昔物語）廿六。上畧男ノ口吉ク固テ我居タル傍ナル壺屋ニ將入ヌ
妻何事ノ有ゾト追次テ入來タルニ云々。（おひすゞひ）の詞可合考

おひかほり（生ヒ直リ）（蜻蛉日記）下ノ下こよひい生ひ直りーて參り侍りつるか死そとおゐせ
侍りーいい千とせのいのちさふまゞき心ちかんー侍る手を折り侍ればおよびをつを
ゝりいいとようふーおきー侍ると思ひやりのたるゝまを侍ればつれ〳〵そでー侍ら
ん月日をとのゐ、をりをそのもーわたりゆるされ侍りかんやといとたとーへかく
けさやゝまいへば（源蜻蛉）五十一此宮例の御心からば月頃のほどまいゝなるをき事
どもをーー出給いまーこよなくーづまり給ひて人目かいい少ーおひ直りー給ふゝかと
見ゆるを此頃ぞ又宮の君まを本性あらいれてかゝづらひありき給ひける補（空穗國

もつり）上七十二御りへりひでろいちりく物〜給とうれさまいりつれバおひなゑりさも
となん

おひかり　生成（空穂嵯峨院）十七りの袖君のよくおひかり給ひつるをいりで内まに參ら
せて〜げか（源花のえん）九見るまゝまいとうつく〜げまおひかりてあいきやうつ
きらう〜〜き心さへいとことあり　補（更科日記）いとうつく〜うおひかりまけり

おひうつ（いせ物）四十段俄まおや此女をおひうつ（文選）馬融長笛賦放臣逐子弃妾注
逐謂逐出之者

おひのゑる（源蓬き〜）五あさちい庭のおもゝみえぎ〜げり蓬い軒をあらそひてお
ひのゑる

おひおとし（盛衰）四十二十一朝夕山さち〜て年貢正税追落し在々所々まに打入

おひおくるゝ。生と追と（賴政集）三十五月五日駒くらべそる所「わり駒とけふまあひく
るあやめぐさおひおくるゝやまくるなるらん

おひ〜〜ま（源まつ風）四おのづりらおひ〜〜ま内の事どもい〜てん先いそぎて大
方の事どもを物せよといふ

補　おひくる（源玉葛）十四まけドたま〜ひまておひきなんとおもふま

おひやる（伊勢物）四十段此女を外へおひやらんとそ

おびやりを（源東や）四十たれり參りさる例のおどろ〜〜しくおびやりをとの給いそ
れバ（同）三冊いとはらだゝ〜ゆまおびやりしされバ（同タのは）廿八あれたる所い狐な
どやうのものゝ人おびやりさんとてけおそろ〜う思ちそるおらん（同）廿九南殿の鬼
のおまゆゑ〜のおとゞをおびやりさんとてけおそろ〜う思ちそるおらん（同手習）五狐いさこ
そい人そおびやりせぞことにもあらぬやつといふさまいとおれさり

おひまどそ〜。オヒナ（源タのは）十七ク ス也おひまどそ〜ておのめわおもひおま〜つべくい
（同玉葛）十五われそあ〜と思ひておひまどい〜ていりゞ〜おそらんおもふま

おひまさり（空穂國もつり）下ノ十四藤つゑの御方よりもおひまさり給ひおんりま〜（源
玉葛）冊二こよおうこそおひまさりて見え給ひ〜り（同野分）廿一おとゝ〜計いさまさり
まもゑの見奉り〜まは又こよおくおひまさり給へるおり

おひあり（蜻蛉日記）中中草どもおひこりてあるを行ひのひままゑりありさせおどそ
る（同）同かゝ岸に木どもおひこりていとこくらりたる（うつ穂樓の上）下十六六くり
の木のつまの草い高うおひたいふれて〜もざままおひこりて云々（蜻蛉日記）上つ
くろいせ〜草なども煩ひ〜よりもドめて打そてたりけれバおひこりていろ〜〜ま

さきゝざれたり

おびえ（崇神紀）八其軍衆脅退（オビエニク）（宇治拾）一ノ十九小藤太おびえてのけそりゝへりゝるほどゝ補（濵松）四下ノ、わゝぎゝおびえてれいあらゆいゝどゝうあき給ふ（著聞）十六ノ廿九おびえて身をふるふゐどゝ（源玉葛）十二おびえておとゞいゝろもあくなりぬ

おびえまどひ（枕）一ノ四。翁丸所ノまことゝとてしれものゝ犬ナレリしりかゝりされゝ猫おびえまどひてゝその内ゝ入りぬ補（著聞）卅六おほきゝおびえたゞどひて

おびえさゞぎ（源わゝの宿）上ノ百一猫のおひつきて俄にゝそのつまより走り出るゝ人々おびえさゞぎてそよ〳〵とゝどゝろぎさまよふけもひども

おひて　追テ（源わゝの宿）上ノ七十御車ゝおひて奉れ給ふ

おひさき（源のゝゝ木）十三ゝゝばゝり遠き御ぐゝのおひさきゝゝゝやつさん事も心ぐるゝけれゝば（同竹川）五人ゝまさりたるおひさきゝるくみえ給ふを（同帚木）五おやあどたちそひもてあげめておひさきこもれるまどの中ゐるゐどい（同椎のもと）十一何でとゝもさのもゝゝゝあきおひさきのゝくゐきゝなん侍れど（同とし姫）四十三「命あらゝゝそれとゝも見まゝ人ゝれゝいもねゝとめゝ松の生さき

おひさきとほゝ（源うす雲）三おひさきとゐき人の御うへゝ（同をとめ）四十六おひさきとゐき人さへ補（源まき柱）廿とゝもかくゝもさそらへゐんおひさきとゐうて

おひさきかく（枕）八ノ十。大夫ハ、云々庭いと清げにて紫ゞゝゝていよゝゝけわさゝて布さうゝもりてゝまひさるよるゝ門つよくさせゐど事行ひたるいゝどうおひさきなく心つきなゝ。抄、行サキノタノモシカラヌ也

おひさき見えて（源わゝの紫）云々走り來る女子あまさゝえつる子どもゝ似るべくゝもあらゝゝいゝゝうおひさきゝえてうつくゝげゐる形ゐり（同うき舟）八ゝそべて此子ゝゝ心ちなうさゝ過ゝて侍りおひさき見えて人ゝおゐどゝなるこゝそゝゝゝけれとにくめゝ

おびゆ（万）二協流（オビエル）（字鏡）慴又怖於比也須（万）二ノ卅四とらゝはめるとゝもろ人のおびゆるまでに

○やとおびゆれど（源とゝきゝ）卅九物ゝおそゝるゝ心ちゝてやとおびゆれど

おひゝげる（古）戀五、よみ人ゝらす「てふれどゝもあふ夜のおきゝわゝれ草夢ぢゝさへや生ゝゝゝるらん

おひゝゝゝゝ（源をとめ）十八人ゝれゝ思ひ給へこゝろざゝたるをかういふさいゝひ人のゝらの后ゞねこゝそまさ追ゝゝゝゝひぬれ

補 おひそる（拾員外）下「子日そるをしるの野べの小松ぞらはるゝ見ゆる千世のおひそる

おも 面（源よもきふ）五 あさぢゝ庭のおもゝをえぞおげり 補（玉葉）冬、九條大臣女 左「さゞひとへ上ゝこそれる川の面にぬれぬ木の葉ぞ風におげるゝ（月詣）十 長眞「こけの上ゝ木の葉ちりつむ庭のおもをむゝしの人の朝きよめけん（同）同 親宗「とゝふれど人もとらもぬ庭のおもゝいくへ木のもの散つもるらん（同）同 顯家「ちりつもるこのもゝ（せしィ）ぐうへゝ霜おけばあさきよめける庭のおもゝな 乳母

おも 乳母（万）十二ナリ「こどりこのためこそおもゝもとむといへちのめや君ゲ於毛求むらん（古事記）中ノ 廿九 御母（オモ） 補（万）十二 十「くやゝくもおいゝけるゝもわゲせこゲ求むや乳母ゝゆゝまゝものそ

補 おもたへ（拾玉）七「わゲ心神と佛とおもたへて此世の人のよそゝおりぬる（著聞）十九 十八 古今哥ゝおなゝ枝をわきてこの葉の云々と侍るをおもたへていへりけるあるべゝ

おもゝぬやま（源夢のうきゝゝ）十 八「のりの師とたづぬる道をゝるべゝておもゝぬ山ゝふみまよふ哉（後）春中 朝忠「時ゝもあれ花のさゝりゝつらけれぱおもゝぬ山ゝ入やゝおまゝ（大和物）四「花をゝき君ゲためゝぞおびくめるおもゝぬ山の風ゝふけど（六帖）二「もこぢこゝきみゝおくれてひねもそにおもゝぬ山をおもひつる哉（新拾）雜下 實方「おゝもりて弓の袋とゝるゝ〳〵やおもゝぬ山のものをいるらん 補（續後撰）雜下 師氏女「あゝれとものおもゝぬ山ゝ君ゝいらぱふもとの草の露とけぬべゝ

おもゝく（狹）四、中 四十三 かゆ杖引ゝくゝつゝかゝみにうゝぱひ又うゝれドとよういゝさるをまひおもゝくどもゝおのゝをゝゝう見ゆる哉

おもゝざりゝさまゝ（源よこ笛）七。女三 出家ノ「ナリ かく思ゝざりゝさまゝて見奉ことゝおゞをゝつけておん

おもはゆく（盛衰）六ノ 十八 子あゲらさをゲにあの顏ゝ物のゞゝて相向むん事おもゝゆくやおももれけん。むゆの處考合をべゝ

おもはゝる（枕）三、七 女ゝたゞ口つき愛敬つきおとゝひの下くびなどをゝゝ多ゝて聲ゝくゝらざらん人なんおもゝゝゝるべき

おもほせ（空穗 初秋）下、六 十三 をゞろかりとものこそおもへまたかゝこゝおもほせいゝゞあらん

補 おもゝゝき（著聞）十 九 よもをゲらかゝらひなぐさむゝおもむゝき事ゝぎりおゝ

おもいそ（源夕ぎり）廿八 けおそろしうおもいそるあらん補（万代）夏顕輔「郭公さてしもやまどものゆゑよおもいせさりやさよふくるまで（同）雑二 俊成「やどことよおもせたりやくれてゝたゞしまたるゝいさよひの月

おもたぎよ（源帚木）四十 たゞふべうもあらぬこゝろのしるべを思たぎにもおぼめい給ふりあ（同わゝ紫）廿四 御こゝろのへだてもまさるといとくるしくおもたぎよ（忠見集）「いづゝさよさちよれとてゝ春ゞをこおもいぎよのこ空よみめらん（源すま）十 例のおもいぎあるさまよやおぼしあしつる（同）同かゝる世を見るより外よおもいぎなる事い何事よゝとばゝりの給ひて

おもいぎあり（土佐日記）此わらい云々かくいいふものゝうつくしければよやあらんいとおもいぎあり

おもよ 重荷（古）誹諧、よみ 人しらす「人こふることをおもよとよあひもてあふこあきこそこびしゝりれれ（後）雑二、よみ 人しらす「ゝぎあらぬ身をおもよゝてよしの山高きなゆきをおもひありぬる

補 おもにゝあづけ 重荷小附 ニ（後）賀御製「ことの數つまんとそあるおもよゝいいとゞ小づけをこりもそへあん（万）五ノ、長哥 卅七 まにゝおもき馬荷（ウマニ）に裏荷（ウラニ）打といふことの

でと

おもよくき（枕）五、九 帳臺の夜行事の藏人いときびしゝうもてなしてこのいつくろひ二人童より外いいるまゞとおさへておもよくきまでいへば（紫日記）あどゝかあらぎしもおもよくゝひき入たらんゞゝこからん又あどてひさゝけてさまよひさしいづべきよ

おもかえぎ（土佐日記）くるしれば何事もおもかえぎ（順集）五 十「かきさえてとも ぬいうへもおもはえぎかゝるよしあぬ身をいゝよせん（伊勢物語）初段 おもはえぎふるさとよ

おもかゆ（順集）四 八十「松の木に藤かゝれり男女むらがれるたり或いをりてさす「住吉のきしの松さへおもかゆれ手よさへかゝる藤なこの花（万）十七、廿一「しら波のよそる磯間をこゞ舟のかぢともまたくおもかえし君（齊明紀）五 あひだもなくもおもかゆるゝ

おもはい（源桐つは）七 わりあくおもはしながらまりさせ給ひつ（同）十 若宮いゝゝよおもかしさまふよりまゐり給ん事をのみ

○おもはしゝく（源夕ぎり）九 ゝやうのなこ〳〵までいおもかしこのゝらざりつるを

○補 おもわーき（万）十八、卅四 たゞさもりうなりけりゐておもほーきことものたちひ
（同）十七、長歌 廿三 おもわーきことゞかよもぎ
わーきことゞかよもぎ
○補 おもわーめを（万）十五、三十二「とほくあれゞ一日一夜もおもわぎであるらんもの
とおもほーめれゐ
おもへゞ（狭）四、下 卅三 ひとりまうちをりせてわれゝうせ給ひぬるもおもへゞさまゞ
まかゐーう（同）廿九 神の御心ハおもへゞかさとれおく 補 一格（古）冬宗干「山さとゝ冬
ぞさひーさまさりれる人めも草もかれぬとおもへゞ（散木）「世のありゝおもひく
まかきものなれやさのむ身をーもいとふとおもへゞ
おもへど（源夕のは）五十 二 おもへどあやーう人まゝぬまゝろづよさまても
おもへども（源末つむ）二 おもへども猶ありざりー夕りほの露まおくれーほどのこ
ち（古）離別、あつもき「おもへども身をーわけねゞめまみえぬまゝろを君まさくへて
ぞやる
補 おもへり 面のけーきまて俗まゝ顔ぶり顔色なり（詔詞解）五、四 十九
おもへらざりー（源みとつくし）四 めでたき人ゐれぞさーも思へらざりーけーき

おもへらぎ（源帚木）三十 りへりをぞうも思へらぎ（土佐日記）ふかこりぢとりゝふ
あうたうたひて何ともおもへらぎ 補（伊勢物）女もたあもトともおもへらぎ
おもと（空穂 俊のけ）四十 一 みる人いざきうつくーみて親ゝあるやいざわゞこにと
いへゞいをおもとおもれるとてさらまきりぎ云々魚をとりまいできされどいと氷
りたくていをもなーおもといりゞー給もんぎるぞといひておく（同）四十 三 何ーまこ
の山まゝあるぞと問へゞいをつりまきつるぞおもとまくもせ奉らんとてといへゞ
（同 藏開）下、廿五 いさやらうたーとおもふものそもーいりおらんもとおもふぞおそろ
ーきやおもとまもあえ物にゝけーうゝあらドりー（源わのあ）上、七 十九 さゞ御事をこゝ
ろまりけて云々わゞおもとうまれ給もんとせーそのとーの二月のその夜のゆめま
（空穂 初秋）七十 一 かの朝臣まこよひのいひでとの數まつりうまつれと物ーつれゞお
もとまきこえよと申されつる（同）五 政頼娘ひとりのけんおもとまゝ何をりゝけ給
むんぎる（同）八十 四 楊貴妃ハ七月七日長生殿まて聞えちぎりれをゞおもとまゝ今宵
仁壽殿まてをちぎり聞えん（源夕のは）十 四 さゞわれどちとーらせて物おどいふわり
きおもとのたべるを（同うつせみ）十 又おもれるゐたそとゝふ民部のおもとおめり
けーうゝあらぬおもとのたけだちりなといふ云々わたぞのゝ口まりひそひてりく

れたち給へれバあのおもとさーよりておもといこよひうへはやさふらひ給つる（同玉葛）十三姉おもとハ類ひろくおりてえ出さゝぎ

おもとたちや（枕）七、三女房の廊はひまなくさふらふをあおいをドのおもとたちや翁をバいりはそこおりとわらひ給ふらんと云々

おもとびと（空穂くら開）上、十六四御帳のうちはハやんおとなき上らふのおもと人おとさふらふ（庚申夜奉和哥）ミそのうちにさふらふおもと人は補（三代實録）十七侍者オモトヒト

おもりゐ（源末つむ）卅つゝミはころも箱のおもりゐは古代おる打おきておー出さる（榮見とてぬ夢）四十一太上天皇ハよにめでたき物はおハーませどこの院の御心おきておもりゐおらぎおハーませバあそあれ（狹）一、卅四上若くより猶やんでとあき方は定まりぬるハおもりゐはよき事おり（源やとり木）十一いりはおもりゐおる御てゝろおきておらまー（同）三母女御よりも今をあーおづやりにおもりゐおる所ハまさり給へるを（同末摘）十七わりびさる聲のことはおもりゐおらぬを人づてにハあらぬやうはて聞えおせバ（同橋ひめ）十うちわらひさるけもひいまをあーおもりゐによーづきさり補（源をとめ）五十五御ありさまのこゝろにくゝおもりゐはおハーませバ

（同をたるゝ）卅一うつほの藤原の君のむをめこそいとおもりゐはもらゞーーき人にて

おもる（源桐つぼ）六日々はおもり給ひて只五六日のゐどはいとよとうなをバ

補おもさ（万）九ノ卅四もち月の滿有面輪二花のでとゐをてさてれバ

おもわをれ（万）十一ノ四十七「衣ーもおゐくあらおんとりゐへてきおバや君ゞおもわをれさらん（榮見とてぬ夢）一「墨ぞめの衣うきよの花ざりおもわをれてもをりてけるゐお（六帖）一、下「ゐゞろふのひとめゞらはやあやーくもおもわをれせぬ妹はもある哉（同）五（万）十一、「おもわをれいゐおる人のをるものぞわれハーゐねつゝきてー（六）ぎてーおもへバ（同）十一、廿二「人でとのーゞきをもるとあハをあらバ終はやあらゞおもわをれおん補（万）二十「おもわをれざにもえにやとさはぎりてうてどもこりをも戀のやつこハ

おもゞハり（源東や）六十八「さとの名も昔ながらにみー人のおもゞハりせる閨の月ゐゞ（同さゝき）一東宮み奉らでおもゐむりせんことあもをはおゞさるれバ（後拾）哀傷實方「契りありて此世はまたもうまるともおもゞハりーてみもやわをれん（續後紀）五ノ十四變顏容世須（万）十二ノ四十二「あらつの海吾ぬさまつりいもひてんもやゐへりませおもゞハりせを（源まつ風）十六「いさらるハもやくのこともわををドそもとのあ

るゝやおもげいりせる（金葉）賀、堀河院「よゝふれどおもげいりせぬ川竹いなげれて
の世のさめーなりけり（詞花）戀上、家時「霜おらぬ人のまゝろいろうつろひておもげいり
せぬーら菊の花（長門本平家）十四つきせぎさー入るものとていもりくる月のそぞ
おもげいりせざりける（孝德紀）不易面（オモカハリセズ）補（千載）雜上、成仲「ぬくとーい波とゝもはや歸
るらんおもげいりせぬわゝのうらゝか（同）同、静賢「ありなくまさも此よはめぐり
こゝおもげいりそか山のその月（同）同、俊惠「此世にて六十年いなれぬ秋の月ーでの
やまぢもおもげいりそか（拾玉）一「五月雨の日とふるまゝはみなれ川みなれーせ
ぜもおもげいりつゝ（續拾）雜下、信實「むらーをゞ面げいりーておもへとも見ーよわそ
れぬ月のゝげゝか（新拾）雜中、長舜「いゝはせんうーとおもひーよの中の面げいりせで
身こそ老ぬれ（新續古）旅、經信「旅ねそるあーのこやはて見る時もおもげいりせぬ秋
の月ゝか（後拾）秋上、御製「やとでとはおなゞ野へをやうつにらんおもげもりせぬをそ
あへーゝな（金葉）雜上、雅光「むゝーはもあらぬすゞたはゝりゆゑどなけきのみこそお
もげいりせね

おもゞくー（万）十一「むゝへれゞおもげくーそるものゝらはつきてそまくのゐー（あひみれゞ、署）
き君ゝも（源やとり木）廿八宮もおまもーたおきはおまやゝある事おどいふともえい
ひ出給いぬおもゞくーはや（狹）三、中てゝいろめざきやうはいあるともいとほーくの
給へるは是をおもゞくーはせんと思ひてかゝる物をおん思ひゝけぬ（源帚木）四十六
さをゞは御文をおもゞくーはひろげゝり（万）十二、九「たまゝつまあもんといふいさ
れおるゝあへる時さへおもゞくーせに（枕）十一、廿五日頃ふりつる雪の云々むゝ〳〵（おもものくーて、春）
くろきおれ屋のうへいたゞおーおべてをろきはあやーきーづのやもおもゝくーゝ
て（源えつ音）九はふいりんゞ客のことはまぎらいーてそおもゞくー給ふ（花）臨時
客の乱はことよせて紫上に正躰は向給いぬをいふおり補（万代）冬、定頼「もえぢをの
散つむ時ぞうちもへて拂もぬ庭のおもゞくーなる

おもゝげ（兼盛集）「あなこひー雲間の月に人をそておもゝげにのみそへるころゝ
な（源あふひ）四十九ゝくて後いい内はも院にもあゝらさまにまゐり給へるゐぞざにー
づこゝろなくおもゝげはおひーけれゞ（六帖）四「めをさめてひまより月をおゞむ
れゞおもゝゞはのみ君いえいつる（源桐つぼ）十はむひゝたちのおもゝゞにつとそ
ひておゞさるゝも（同えー姫）卅そゝーゝりつる御はむひどもおもゝゞはそひて
（万）四ノ卅二「めふされゞ物おもひまさるそーひとのことゝふをゞたおもゝゞはーて
（後）春下、躬恒「いつの間はちりもてぬらんさくら花おもゝゞはのそ色を見せつゝ（源

夕のは）廿九夢ゝえつるかさちしたる女おもゝ夕ゝゝえてふときえうせぬ（同末つむ）廿八鼻のいろゝ出ていとさむしとゝえつる御おもゝ夕ゝふと思ひいでられて（伊勢物）廿一段「人ゝいさ思ひやすらん玉ゝづらおもゝ夕ゝゝのみいとゞゝえつゝ（万）十一、廿六「とものゝびのゝ夕ゝにかゝよふつせゝのいもゞゐめりしおもゝ夕ゝにゝゆ（同）十二、卅三「とはゝゝをゞゞ姿ゝゝえゞ常のでといもゞゐまひゝおもゝ夕ゝゝして（光廣卿春の曙）（拾葉）廿八「おもゝ夕ゝのかゝるとむゝりをるたびゝ更ゝゝむゝふゝドのしらゆき（保憲女集）「色もゝも汀ゝやどる山ぶきのおもゝ夕ゝだゝもちりのこらぬん（狹）四、上卅「おもむゞゝありゞたゝりつるおもゝゞげゝゝわゞれ給むゞ補（万）十二、卅三「とゝしもへゞかへりきあむと朝影ゝまつらん妹ゞおもゝ夕ゝゝ見ゆ（同）三、四十一「ゝちのくのまのゝゝやゝゝらとゞけどもおもゝ夕ゝわして見ゆとふものを（古）戀四伊勢「夢にだに見ゆとゝ見えドゝ朝ゐ〳〵わゞおもゝ夕ゝゝもづる身なれゞ（新古）戀五俊成女「ゆめゝとよみしおもゝ夕ゝもちぎりしもわゞれゞあゞらうつゝゐらねゞ（美濃家つと）云々さて此歌ゝてゝおもゝ夕ゝゝ常ゝゝいふとゝゝいさゝゝゝかむりて其人の顔姿を云なり（尾張家つと）常とゝ何ゝ殊ゐらん一首の意先ゝ相見し時のおもゝ夕ゝも身ゝそひてゝすれゞ其時契りし事も耳ゝ殘りて忘れゞゐゞら人の心のゝゝりてうつゝともおもゝれねゞゝもし是ゝ夢ゝもしらぬとゐり（玉葉）雜一、入道前太政大臣「久方の月ゝむゝりしの鏡ゐれやむゝへゞうゝふ世々の面ゝ夕ゝ（新千）戀二、西園寺内大臣女「いゝゝねて見えつる夢のおもゝ夕ゝぞさしもゆるさぬ中の契ゝ（新勅）雜三加茂重保身まゝりて後つねゝ哥ゝゝ侍けるものども跡ゝまゝりあひて遇友戀友といへるこゝろをゝゝ侍りゝるゝよめる覺盛法師「うちむれてゝづぬるやとゝむゝりしゝておもゝ夕ゝのゝぞあるドゐりける（新後拾）春下實方「くるとあくと見てもめゞれゞ池水の花のかゞゝの春のおもゝゞ（續古）秋上太上天皇「有明の空ゝも似ゝる山のむゝ入ゝゝりぬる月のおもゝゞ（新後撰）雜中爲教「見てもゐゐありしゝよゝ似ぬおもゝ夕ゝや老をまゝゝのかゞゝゐるらん（新古）戀五俊成「思ひゝび見しおもゝ夕ゝゝさておきてあひせざりゝむをりぞこひしき（赤染衛門集）「ゝゝゝれとものしらゞゞゐるおもゝ夕ゝゝこひしとだゝもおもゝゞゞな（新古）戀五定家「かさやりし其くろゝゝのゞぢでとゝ打ふゝはどゝおもゝゞゞぞゝつ（拾愚上、曉戀）「おもゝ夕ゝゝゝゝれゝゝるゝねのおとゝゐらひゝなしきゐのゝめの空（新勅）春上俊成「おもゝゞゞゝ花のゞゞたをさきざてゝいくへこえ來ぬ峯のしらくも（伊勢物）「ものゝとせに一とせさらぬつくもゞみゝれをこふらしおもゝゞゞゝ見ゆ

補 おもざゝ（風雅）春下定家「おもざゝや下葉ゝまゝるかきつゞゝ花ふみゝけてあさる

しらさぎ

おもだゝし（うつゝ嵯峨院）四十九ふところよりといふぞりまおふしたてゝいろでこまをざまひとおもとゝ〳〵まとおもひしまあるときいたいめんまおもだゝしきとき もあり（同くらひらき）下、五されど世をゝさねヨをつゝて此とゝでろことまのよひたまふいいゝまおもだゝしき事あり（蜻蛉日記）聞えもおもざゝしげなりつるあどかさるも（源夕のは）五まゝていとおもざゝしうあづさひつゝうまつりけん（同玉のつら）廿九とりわきて右近をめしいづれがおもざゝしう覺ゆ（同東や）七母上のかなしう給ひておもだゝしうけざゝき事（同うす雲）十五又おもざゝしくうきしう（同東や）十六守のゝくおもだゝしき事に思ひてうけとりさわぐめれば（枕）一、廿六まつりのつゝひあどまは出たるもおもだゝしゝゝらぎや補（蜻蛉日記）下、下ものいひあどし給へば おもだゝしきこゝちを（源わかな）下、十二四いとうつくしくおもだゝしとおもひきこえ給（空穗國もつり）中、十七六おはやけにまゝらいんまおもだゝしく侍るべき（枕）十一、七そこまに入るて見るいいとおもだゝし（源わかな）上、十四八うれしくおもだゝしきことをも身まあまりて

補おもたげ（枕）三ノ十四打ゝけさるむゝまのおもたゞまいやしう

おもねり（神武紀）佞媚補（散木）「ちつのゐきとちのわたをもこえぬべしそれまおもねる心ありせば

おもな（源玉のつら）卅九今少し光りをせんやあまりこゝろまくしとの給へば右近ゝゝりげてよをおもあの人やとをあしわらひ給ふ（同竹川）十うたてのでさちやむづゝしげなるまめ人をさへよくあをおもなけれとしのびてのさまふあり（万）一、廿五「くれまあひてあしさおもおをあがりまゝけあげき妹がいはりせりねむ（源槇柱）十八いとおもおう人わらへあることあり。（孟）面目ナシトナリ（同紅葉賀）廿九おもあのさまやとを給ふも

おもおれ（好忠集）序もゝしきの大宮づゝへつとむとてをべらぎの御垣まおもおれて（續世繼）いまゝとまちもべりしゝゝどいまおもおれて常まかくてあらんぎるやうに念佛おどもおこたり（重之集）十七「いづれをゝ花ともわゝんもるくれがちりくる雪におもなれまけり（元眞集）「千もやふる神のやしろにいのりくる道のゐどさへおもおれにけり（蜻蛉日記）下、中それもよろづをあげめおもふまいといふゝぎりまもあらねど今いおもなれにたる事などいいゝまも〳〵思もぬまと云々（枕）九、五かくを る人々も家の内出そめにんほどいさこそい覺えけめどゝくしもてゆくにおのづゝ

らおもなれぬべし（狹）二ノ下廿九さてこそハろぎりの別のそぢも少しおもなれ給もぬあど（濱松）三ノ卅七此度ハのさゑよとよなくおもなれ給へるこゝちして補（壬二）下、山家の心を

「麻でろもまさおもなれぬおく山の樒のもなの露よぬれつゝ（新古）秋上長家「とゝを

へてもむべきやどの池水ハほゝあひの影もおもなれやせん（蜻蛉日記）中、上「あまさ

とゝこゆる山べよ家ゐゝてつなひく駒もおもなれにけり

おもなれて（源みゆき）十七いまゝへハけふおもなれてあやゝくたい〳〵ゝきまで補

（風雅）戀三公宗女「哀ゝらドつねの恨よおもなれてこれそまことのかぎりありとも

（玉葉）雜三光俊「うきたびの身のあらまゝよおもなれてそむきゝちそる山のおくろな

（新後撰）戀一長明「うき身よハさえぬなげきよおもなれてものやおもふと問人もなゝ

（金葉）冬、六條右大臣「朝でとの鏡のそ夕よおもなれてゆき見んとゝもいそげれぬ哉（風

雅）雜上土御門院「時わゝぬ泪に袖ハおもなれてかそむゝらぎ春夜月

○おもゝなきて（重之集）八「ちる花をゝゝむとやなくうぐひそハおもゝなれても

見ゆる春ゝな

おもなく（枕）三ノ十五下女のきハゝ云々年老てものゝ例などゝりておもなきさまゝさ

るもいとつぎ〳〵ゝう（源とし姫）廿七霧もれゆゝばはゝたなゝるべきやつれそおも

なく御覽ゝとゞめられぬべき（同蜻蛉）五ノ十三弁のおもとゝてなれたるおとなそも

むつまゝく思聞めべき故なき人のもぢきこえもべらぬやハものハさこそハ中々侍

けれゝならぎその故たづねてうちとは御覺せらるゝにゝもべらねどゝばゝりお

もなくつくりそめてゞる身よおもさらんもかたもらいさくてなん（中務集）廿八「こ

ころゝてあらまゝものを夢とてもいゝゝぎおもなくこえわたりはん（伊勢物）卅四段昔

男つれなゝりける人のもとへ「いへばえよいもねばむねよさわがれてあゝろひと

つよなげくあろゝなおもなくていへるなるべゝ（蜻蛉日記）下、下さるまゞき人ざよ來

とふらふめると見るまゝちぞゝへてさゞならざりはる馬のかこもおもなくゝばゝ

ばとひ給ふ

おもらゝ（增鏡）某の中將を御使にて修明門院の御方へ何よても男ぞもよ給ハせぬ

べからんのり物を申されたるよとりあへぎちひさきからびつのゝなものゝさるゞ

いとおもらゝなるとまゐらせたり此御使のうへ人なよならんといとおゝゝくて

かたハゝほのあけてこるよ錢あり

おもむく（空穗藤原君）十九なでふ事のたばゝりをゝてゝ女のおもむくべきとの給ふ

時よ（同夕ゝほ）五十いづれの道よさだまりておもむくらん補（蜻蛉日記）中、下春日詣から

うゞてまうでつきてこてぐらたてまつりてもつせさまゝおもむくあそらゝこあり
ーさてまつりけれゞ云々からうゞてつぎいちゝいたりて云々日もくれもてぬ

おもむけ（源わふひ）卅九 さやうゝおもむけ奏させ給へ（同すま）三 おくれ聞えぎとだ
ゝあらゞおもむけてうらめーげゝおゞいゝさり（同藤のうちゝ）四 過にー御おもむけ
もたのみきこえ給ひ（源匂宮）三 さる御けーきあらんをゞもてもなたるもあるまゞ
うおもむけていたう（同夕のほ）十一 六條わたりゝもとけがたりー御けーきを
おもむけきこえ給ひてのち（同わけまき）七 今ゝとざまらうざまにこまらかる筋ゝ
きあえかよひ給ふめるにらの御方をさやうにおもむけてきこえ給ゝゞとあんおゞ
すべらめる（同）廿 昔の御おもむけも世中をかく心ぼそうて過ーもつとも中々人
さらへゝかるゞーき心つゞうかゝゞの給おきーを（同蜻蛉）四十九 うけひきゝこえ
中后のこやゝ参らんとかんおもむけたれゞいとよりなり（同末つむ）十二 もてもかれ
てゝげかき御事どもおもむけもべらぎ（同わの紫）卅六 ちでならぬよもひのまだもら
ばらーう人のおもむけをもこーり給ゝぎ（空穗藤原君）廿一 わら大事のひゞりの君て
の事おもむけーめ給へ 補（源のけろふ）廿六 いらゝ思ひなゞらんかどおもむけてかん常
ゝあゞきさまひー（同わのか）上六 よの人もおもむけうさゞひけるそ（同）同十八 さやう

ゝもおもむけさてまつりてめーよせたらん時（同）同十九 人づてゝもあらぎさゞりり
おもむけさせ給へりー御けーきをこたてまつりてーらゞ（同藤とのま）十五 さゞおは
とのゝ御おもむけのことかるゝこそいあれ（同手習）五十五 かゝきたちたる人もあ
るやうゝおもむけて（隆信集）いと心づよかりけるひとをいひおもむけてかくー忍
びたべるそきとのさまのあやーけれゞ（同玉鬘）卅四 いらでーらぬ人の御あたりゝい
まーらむんとおもむけてくるーゞゝおはさるれど

○補 おもぶけ（續紀）十七 詔 於母夫氣教

おもむき（躬恒集）四十 その屏風の哥所々の題おもむきにーたゞへり（同）四十一 是も題
のおもむきゝよる（源帚木）十二 ーづらかる心のおもむきあらんよるべをぞ（同）六お
のらゞゝのたてさるおもむきも見えて（同みもき）十三 まつりでとのおもむきそーる
ためたらんことい（同少女）五十二 水のおもむきやまのおれてをあらさめてさまゞ
ゝ云々つくらせ給へる 補（同）卅二 その子ぞ心ざーのふらさあさゝのおもむきをもこ
さだめて

おもむき（空穗藤原の君）九 天女と申ゝとも下りまーかんいゝんやさいの人ゝ國王
ときこゆとおもむき給ひかんをや（源玉のつち）九 同ゞこゝろゝいきはひをかい

にべき事あどのたらふは二人いおもむきまとり（同あのし）三十まづこひしき人の御事を思ひ出きてえ給ふやげて馬ひきをぎておもむきぬべくおぼえ給（源紅葉賀）いとゞき道ありともおもむきがさくおぼえ給（竹取）此吹風いよき方の風ありあしき方の風はいあらぎよきりたはおもむき吹なり

おもの。おものいとしものゝ略　みてをものとのく也（源紅葉賀）廿おものあどこあたはまゐらせさり（宇治拾）二、白米十石をおものはしてて（三代實錄）四十五、老人爾賜御物（空穗あて宮）三沈のお物は白らねのむしーつげひ（同藏ひらき）中、一あべのふさのかへりでとい物とりくふ翁のかさをおものをまろらして作りをゐてそれはかくらき給ふ（拾）神樂

「とゞこほる時もあらゞを近江あるおものゝむまのあまれをつぎい（宇治拾）七、九水飯を引よせて二さび計むしをらいしー給ふとをるゐどはおものをなうせぬ（堀太）氷室

俊頼「をへらぎの御こととのをゐのたえせぬいけふも氷室におものたつなり（夫）十爲家

「おほを田のことしのわさのむつおおもの神のやしろにけふをあふなり。つはもの歟（源桐つは）十九大床子のおものあどい（落くゐ）一おものもいできにれいをづしー所はきて（和泉式部續集）あづきのおものといふものをひとりのをけはいれて（大鏡）八鼎をたてゝ湯をさぎらしーつゝおものをいれていみどうあつくてまゐらせわたしたる

を（枕）三、廿一　みづしー所のおものざあの（同）十二、十六あむせものををなくひつれいおものいふようあめりと見るゐどは（延喜玄蕃式）大食（同内匠寮式）御飯笥（續後紀）一、十七

給御物（文德實錄）廿八　取給御物御（拾玉）四「けふぞらしーなづなむあべらせりつを

てむや七種のおものまゐらむ（源藤のうらい）廿五てうどて御ものはまゐる（空穗國

もつり）中ノよさりの御物御まへでとにまゐる（宇治拾）七、九ひはおものををくひつ

廿一　コレモ飯也

つ云々ひさはのものをあはあれい

おものざな（禁秘抄）御膳棚（同）上、九膳棚（仁德紀）七溫飯

おものやどり（枕）六、五おものやどりの北はよりさる間はたとねさしいでゝをゐさり

（禁秘抄）御膳宿臺（榮根合）十七さいりひろき院内のひまあく女房の局はたわさー

たるおものやどり（江次第）七、廿三御膳宿

おもしー（枕）九、四受領もさてぞあめるあまさ國わ行て大貳や四位あどにおりて上

達部はなりぬれいおもしー（源東屋）御心むさいみどうおもしー（同みとつく

し）卅六母みやをを所いとおもしーくこゝろふりきさまに物しー侍りしー（同花の宴）十三

おもしーういあらねぞおしーあべてのわりうどはいあらを（同夢のうき橋）四おも

おもしーうおいをるとのゝかくわざとおいしーさることゝもてさどぎ聞え給ふ（同末

つむ)卅三かれもたくれかゐのおも〳〵しーゝりーをや(同やとり木)八十五猶ことはおも

おもーう思ひやられ給ふ

おもや(源竹川)十四おもやの内はい女ども番はをりて守られ

おもやう(源朝のは)廿三りんざーおもやうのこひ聞ゆる人の面りゞはふと覺えてめでたけれゞ(同末つむ)廿五ひさひつきこよなうもれたるはかほーもがちかゐるおもやうい大りさおぞろ〳〵しくかゞきかゐるべー(枕)十一八額髪のかゞやりにおもやうよき人の(源手習)五十八こまりはうつくーきおもやうのけさうをいとゞくーたらんやうはありくにはひたり

おもやせて(源桐つは)六いとはゐひやりはうつくーげかゐる人のいといたうおもやせていとあもれとものをおもひーゝかゞら(同わふひ)四十三いといさくおもやせはけり(同夕のは)四十二いといさくおもやせ給へれど(同わの紫)三十たちかやゝおもやせ給へる

おもふはたゞいぬ(源まき柱)十一おもふはたゞいぬこゝちー給ふ

おもふべきひと(源夕のは)五めのとやうのおもふべき人い(同)四いもけありりけるゐぞにおもふべき人の打そてゝ

おもふどち(土佐日記)「さてゞたつゐれゞまたるる吹風と波といおもふどちはやあるらん(四條大納言集)「世中いあるりなきりは今いさゞおもふこゝろを思ふどちへん

おもふりさのりせ(躬恒集)四十四「波さゝゞ沖の玉もゝよりくべーおもふ方より風もふりかん(源まつ風)十一おもふりたの風はてりぎりける日たゞへぎいりさまひぬ(後)戀六、よみ人しらす「ちら波のゆくべき山いさたまらぎおもふりたわもかぜいよせかん(源玉のつら)十四思ふりたの風さへをゝこてあやふきまでむーりのゞりぬ

おもふよりさげふ(源とゝきゝ)八いりでむたかゝりりけんとおもふよりたゞへることかんあやーく心とまるわざなべき(同幻)十三おもふよりたゞふゝーありて

おもふ〳〵(源槇柱)十四あでりかうゝつろふ心のいとのろきぞやとい思ふ〳〵猶心げさういをゝこて(同わのか)下百一くるーとい思ふ〳〵參りぬ

おもふやう(源桐つは)三十二かゝる所におもふやうからん人をそそろてそまばや(同東や)今いわゞ姫君を思ふやうにてこ奉らぞや

おもふさま(狹)一、下十八おもふさまからん人をかんゐてゆりんとをるといひおこせたるはいとおもふさまかるこゝちーて(源あのし)四十三いつーりいりでおもふさまに

てゝ奉らん 補（万代）春下 好忠「色見むと植しもしるく山吹のおもふさまにも咲る花哉

補 おもふもしるく（躬恒集）「わがきゝて人にいつげんやとゝぎすおもふもしるく

まづこゝにまかけ

おもて（源すゝ虫）初よるの御丁のかさびらをよおもてをぐらあげて

おもて（源桐つぼ）十門引いるゝより南おもてにおろして（同帚木）卅五 ゐんでんのひ

んゲーおもてもらひあけさせ給ふ（同）同このまーおもてにぞ人のはもひをる（同

朝のぼ）十二 北おもての人ーげき御門を（同紅葉賀）十六 中將の君おもての老かゝるこゝ

ちしておそろーうもかたゞけなくも（同をとめ）廿七 ふと思ひよりぬおもてありをて

おもてむづかし（空穂國もつり）中十七 五あな物くるゝーや人聞こそやさーはれ御方の

おとゞやうやうの事聞給ふらんとおもふこそおもてむづかしはれ

おもてむげまー（空穂藤原君）四十九 そうつものにてもとまーくていあらゞむやお

もてむげまー人のをたいまつるべくあらば國王の一のめまおりさうべらんまもお

とらゞをや

おもてまをづ（蜻蛉日記）中上 これを治せんやうにおもてまを水あんいるべき

おもてる（蜻蛉日記）下下 「五月雨やこぐらき宿のゆふされにおもてるまでもてらに

はさるゝ

補 おもてをあらぶ（著聞）十 おもてをあらべたるものまを心うつーてねたきめ見に

るま

おもてがた 假面（弁内日記）御つれゞーおりーまおもてがたーて人まおどせと仰せ

でとあり（著聞）十二 六 おもてがたひとつ有けるゝそのふるき面をーて顔をゝりてよ

あよあ強盗をーけるあり

おもてなどーろく（枕）六 四 此御方の御手水番のうねめ青をそでの裳ゝらきぬくんた

いひれあどーておもてなどいとーろくて下づゝへあぞとりつぎて參るゑど是もた

おゑやけーうからめいてをゝー

おもておゝんゝたなく（とりゝへもや）四十五 ノ人もーらでやみあんをこそたにき事に

おゑにに此人のかくの給ふにはーき心得給ふらんゝーといとゞうつゝまーうてお

もておゝんゝたなくおゑさるれどわゝびかゞやゝんもわゞ身のありさまにいたゞ

ひたるべけれゞ（源まき柱）卅 おもておゝんゝたなくぞおゑえ給ふや

おもておこー（源夕きり）五十 わゞいまーへをてーあされをみあざなる名をとり給ひ

ーおもておこーまうれーうおゑーわさるを（蜻蛉日記）二、。道綱ノ ワ ゞおもてをお

こゝつる事上達部どもの皆あきらうさげりつる事などゝへば〳〵もなく〳〵かたる（仲文集）三十「あゞ佛顔くらべせよ極樂のおもておもゝをわれのそぞせん（空穗國もつり）下十七年七才よりおらゐゝけるゝ父の手ゝおそくまさりてひきれば父此子としかけ）下ノ廿三

ゐわゞおもておこゝつべき子ありてれゞ手よりされ〳〵もおらひとれと（同國もつり）上ノ廿三よき女子ゐおやのおもてをもおもおすゝもあらぎや（宇治拾）十二ノ廿一日本のおもておこゝたるものおりとて勘當もゆるゝゝてれり

おもてぶせ（源よもきふ）七おのれをばおとゝめ給ひておもてぶせゝおそゝゝさりゝゝりゝば（後）春下躬恒「かざせぞも老もゝくれぬ此春ぞ花のおもてゐふせつべらある（源帚木）十八うとき人ゝをえゐおもてぶせゝやおもはれんともゞゝりもぢて（同蓬生）十三故宮おゐせゝ時おのれをばおもてぶせ也とおそゝゝさりゝ（空穗あて宮）二わゞ子といふものいとおもてぶせ人わらへあるゐおきゞ内ゝとれゐなり出ぬべく門をもひろげうちをもつべきゝもかくあれば（同藏開）中ノ四十六何ゝゝまるらん出てありけばそこゝもおもてぶせゝて補（續千）雜躰俊頼「むゝきゞゐおもてふせやとおもへをや近づくまゝゝかくれ行らん（落くぼ）一子どものおもてぶせゝとておとゞのいみゞくもらざち給ひて（空穗國もつり）下ノ十九さふらもむも御おもてぶせなるやうゐれば云々（同）中ノ六十七まゝとゝ候くやゝうおもてふれべきゐ侍らねど

○おもてそふせ（源わゐゐ）上ノ十五おきおやのおもてをふせ（空穗國もつり）下ノ卅ことの后の御おもてをふそる事との給ふおれば（新猿樂記）十五伏一家之面只在七之娘處

補（枕）十一ノ廿三「さゝゝらゝ柳のまゆのひろでりて春のおもてをふれるやとりゐ

補おもてあらむ（榮わゐ枝）さびゝうおぞえておもてあらむこゝちれども（枕）九ノ三あいおくおもてぞあらむや（濵松）一ノ上よゝゝらぎむづらゝげゐるゝおもてあらむこゝちゝあぐら

おもき（狹）二ノ四下十五あまた立かさなりゝ御木丁ゝまぎれよりて御衣のすそひきとめ給へりいとゞおもくてとみにもえ動られさせ給ゐぬゝあやゝと見かへらせ給へれば（源末つむ）八かのなでゝこゐえ尋ぬゝらぬをおもきこうゝ御心のうちゝおぞゝいづ補（源わゐゐ）下ノ百三おもきやまひをあひたをけてなんまゐりてもべゝ

おもきらた（源夕ゐは）十六いとあさまゝうやゐらゝおぞどきて物ふらくおもき方ゐおくれてひたぶるゝわらびゐるものらら（同帚木）卅月でろふびうおもきらたゝさへらねて

おもぎらひ（夫）卅五「世中ゐいもけおきこのおもぎらひをゝりおきゝゐねこそおら

るれ（源わかな）上四十八　さゞ兒のおもぎらひせぬ心ちして心やをくうつくしきまゝ給へり（蜻蛉日記）下下　其をるゝなりとの給ふほどによういことゝもせんとかんこゆるといへゞゝひかきほとゝもゝのがさりをるゝといふこれゝいとさゝゝあらぎあやゝまくゝおもぎらひをるゑどかれゞ（空穗國もつり）上六十一　犬宮ゝ父おとゞのいだきありきをゝしきものとらせならゝしたまへれををとこをおぢにおもぎらひをゝせぎおほぢおとゞゝゝあしびよびいでゝみんとおぢしてあれゝこそかどいふも

おもし（源さかき）四十七　世のおもしとものしたまへるおとゞの（同夕かほ）冊五　おもくさづらひたべりしゞ（同）四十二　廿よ日よりいとおもくわづらひ給へれど（同紅葉賀）廿二　いとゞうあためいたる心ざまはてそかたはゝおもゝらぬあるを（同をとめ）七つひの世のおもしとかるべきこゝろおきてをならひかゞ（同末つむ）十　おもしとてもいとかうあまりうゑれたらんゝまゝろづきをくわろびたりと（同桐つぼ）三　よせおもくうたゞひかきまうけのきこゝとよはもてかしづき聞ゆれど補（源わかな）下世のおもしとかり給ふべき

おもしろ（古語拾遺）阿波禮阿那於茂志呂補（忠見集）「こかゝこの心ながれて行水よいとゞなでしのかぐらおもしろ（金葉）雜一　内侍「いくとせも君ぞかさらんつもりるておもしろゝりしたかのこゆきを（月詣）雜上、右大臣家備前「あづさゆみむるの花よぞおもひいづるおもしろゝりしゆきのまとゐゝ

おもしろし（万）七ノ廿二「玉くしげみもろと山をゆきしゝゝゝゞおもしろくして昔おもはゆ（伊勢物）初段　ついでおもしろき事とやおもひけん（同）九段　その澤よかきつばたおもしろくさかたり（源桐つぼ）十七月のおもしろきよふくるまであそびぞし給ふ（同繪合）廿一　うへ人の中にをぐをたるをめしして拍子給もいみじうおもしろし（同わかの紫）四西の國のおもしろきうら〳〵磯の上をいひつゞくるもありて（万）十六八　野べをめぐをゞ面白見（齊明紀）「山ゝえて海ゝ渡るとゝおもしろきいまきのうちゝわをらゆまし

補　おもしる　面知（万）十二十九「かみのでときゝゆる瀧の白なみのおもしる君ゞ見えぬゝのでろ（同）十二廿五「みづぐきの岡のくぢもを吹ゝへしおもしるこらゞ見えぬゝろゝも

おもひ（源とし姫）九　耳ゝしがましき川のわさりよてしづゝかるおもひよりなをぬ方もあれど（同のけろふ）冊五　あやよくありしし御思ひのさゝりよりきさえていいとゝみゞけれど（同竹川）冊一　さるゝゝりぎりかき御思ひのゝ月日よそへてまさる七月より

むらみ給ふけり（同ほたる）初さいの姫君おそいとそーく思ひの外ある思ひそひて いりふせんとおぞーそたるめれ（同あふひ）四十七 かゝる御思ひのそどおれば あと ゞーきさまにハあらで（同）卅六 この御おもひのほどハ中々さやうなるそぢまもり け給むぎ（同桐つぼ）四 おほりたのやんでとおき御おもひまて

おもひ。男女ノ（源藤ゑのま）八 いそゞき御思ひありとも立ならび給ふ事かたくこそ むべらめ（同すま）卅一 いそゞりり御思ひのなでりおれば人のそーりもーろーめさ れぎ（同のわき）十六 もとより見おれおぞーさて給ハぬハのゝる御おもひもそひ給へ るおめり

おもひ。喪中ノ也（榮月の宴）十三 御太郎少將ふて敦敏とていとおぞえありておもせー 一年うせ給ひふーぞりーその御おもひにていみゞくこひーのび給ひれるそ（古）哀傷 母ゞ思ひふてよめる（同）思ひふ侍りける年の秋（同）同 父ゞ思ひふてよめる（同）女 の親のおもひふてやま寺ふ侍けるそ（詞花）同 子のおもひ侍りける頃（履中紀）諒 闇ミモノオモヒ

おもひいとかむ（源ゐーい木）十 思ひいとあそつりうまつる御うぶやのぎーきいり めーう

おもひいたり（源よこふえ）十五 あまたの人のおやになり給ふまゝふおもひいたりふ りく物をこそのさまひおりふたれとて（同帚木）十八 もとよりおもひいさらざりける ことふもいりで此人の（同花のえん）おもひいさらぬくまなき

おもひいそぐ（源やとり木）三 御もきせ奉り給むんとて春より打もゞめてこと〳〵 おくおぞーいそぎて（同紅梅）六 わゞ方さまをのみ思ひいそぐやうおるもこゝろぐ るーおどおぞーて（同東や）わゞこゝろひとつふりう思ひいそぐも

おもひいられ（源おけまき）六十四 ゞそどへふけるゞ思ひいられ給むぬふーもあらぬふ （同をとめ）四十七 おもひいれぬさまにてを物ー給へ（同帚木）四十一 ふりく情おくうー と思ひいでさるさまもゞふおぞーいられさる（同夕顔）十九 つらきもうきもかたいら いさきことおもひいれたるさまおらで（同さゝのき）卅七 ふりうも覺ーいれさらぬを （同若紫）四十二 いとりう思ひおいり給ひそ（同うき舟）卅四 そゞろなることおぞーいる るのゝおん罪ふりゝりける（源うきふき舟）三十 かうおぞーいらるれどおむーまにおとい いとりおー補（万代）戀五、小大進 「つらさをもおもひいれゞとーのべども身をーる雨 の所せきりお（新古）秋上、式子内親王 「ふくるまでおゞむれば おそりおーけれおもひもい れゞ秋のよの月

おもひいふ（源みをつくし）十九親い万ゑ思ひいふ事もあれど（同玉ゐつら）四十二ぶこのそけのこゝろをへをありがさき物ゑ君もおぼゝより右近もおもひいふ（同夕顔）廿一人のおもひいたんことよゐらぬわらいべのくちぎさびゑ成ぬべきかり　補（和泉物）いと心おきさまゑこそおもひいため

おもひいで（源帚木）廿六おもひ出ゝまゝゑまゐりさりゝゐ（同）廿七かのさがおもの思ひいであるゐさにわそれがたけれど（狭）四上廿三出家をゝてもこの世ゑこそおもひいでおゐらめ佛ゑおらんことをおもへばやそくたべるゐゝ（同のゝい木）八いでや此煙ぞゐりてそい此世のおもひ出おらめむゐおくもありけるゐなといとゞなきまさり給ひて（古）春上、よみ人しらす「ちりぬとも香をざゑのおせうめのむな戀ゝき時のおもひ出ゑせん（源桐つぼ）十五うへのゑありさまおどおもひ出聞ゆれど（同帚木）四十七心苦ゝくも戀ゝくも覺ゝ出（同）四十三世ゑゝらぬ御心のつらさも哀れもあさゐらぬ世の思ひ出いさまゝゝめづらゐおるべきためゝゐおとて打なき給ふ（同）十三尼ゑもあさで尋とりさらんもやがてそのおもひいでうらめゝきふゝあらざらんや（同）十一何ゑゐいきゐせんと思へば打そむゐれて人ゝれぬ思ひ出わらひもせられ哀とも打ひとりでさるゝゑ（後拾）戀三、和泉式部「あらざらん此よの外のおもひでに今一さびのあふことも がな（源わかの紫）五十二宮ぞばことゑ思ひ出聞え給いぞ

おもひたゞゐる（源東や）六よろづおぼゝ思ひたゞゐる事のありて

おもひたるけ（源夕きり）十八猶え思ひたるけぞ

おもひたつまゞ（源空蟬）十一あこいらうさけれどつらきゆゐりゑおそえ思ひたつまゞれどえまめやゐゑの給ふそ（空穂忠こそ）廿一されど我をあひおもむぬやうに聞ゆれば え思ひたつまゝくなんあるとの給へば

おもひたなれ（源夕のは）十いまさらゑみぐるゝゐるべゝとおもひたなれたり（同ととめ）廿九打ゐさらふさまなどをうとまゝゝとも思ひたなれ給いざりけり

おもひたなれぬ（源帚木）十三おもひたなれぬ男きゝつれて

おもひたなつ（源帚木）廿一さりともたえて思ひたなつやういあらゞとおもひ給へて（同わふひ）五十さんげゑことの外におぼゝむなさぞ（同末つむ）十おさり顔ゑもものの事をおもひたなちたらんれゝきこそうれもゝゐるべきなれとおぼゝて

おもひたゐら（空穂樓の上）下九とりわけ思ひたゐらなといひ（同國もつり）十五大納言殿の北の方いいづれもゝとよりいとゝきおもひたゐらにて

おもひたぐゝむ（源わかな）下廿三をさおゐらん御娘のやうゑ思ひたぐゝみ奉り給ふ

（同うき舟）三十　かうおぼーいられどおもしーまずといいとわりあー

おもひむげを（源帚木）十七　口をーくいをえどとおもひむ夕をつゝ（同あふひ）五十　参らせ奉らん事をおぼーも夕む

おもひはて（源さゝのき）廿一　御いのりをさへせさせ給ひておぼーいたらぬ事あくのゞれ給ふ（拾）雑上文時　「水のおもゝ月のーづむをみざりせばわれひとりとや思ひむてまー（源夕ゝのほ）四十七　うーとおぼーもてにけり（同手あらひ）四十九　今いかぎりとおもひもてられて

おもひむどめ（源絵合）三　何まうくああゞちある事をおもひむどめて心ぐるーくおぼーあやまにらん

おもひほれ（狭）四、廿　中かあーくいをどく思ひほれ給へりせちまゝ戀ーく覺え給ふ夕ぐれまゝ（源よこ笛）十八　ちゝおとゞのさゞりよまいをどう思ひれ給ひて（同わかあ）下、七十三　式部卿宮もわさり給ひていといたうおぼーれたるさままてぞいり給ふ（同まつ風）六　あひ見でをでさんいぶせさのさへゞたうりあーれればよるひるおもひはれて

おもひわは（源早わらひ）十三　むげまおもひほはたるさまあゞら物うちいひたるけー

きよういくちをーりらぎ

おもひへざつ（源東や）十五　われをおもひへざてゝあこの御けそう人をうばゝんとー給ひけるりおふけなくこゝろをさあきまと（同夕ゝのほ）一　五十　右近いこと人ありけれいおもひへざてゝ

おもひをどこほる（源みのり）三　中〳〵まは山水のををりまはでりぬべくおぼーとゞこわるわどまは（同橋姫）一十　出家のこゝろざーを云々むりなきこととまおもひとゞこわり

おもひとゞめ（源帚木）十七　此人をとまりまとおもひとゞめたべらぎ

おもひとぢむ（源まき柱）十九　人のたえもてんさまををもてゝ思ひとぢめんも

おもひとり（狭）二、廿　上八　おもひとるりたいをこーくものむりあげにわりびたる人ざまありーりば（源東や）十四　いとまさくかーこき君にておもひとりてければ（同橋ひめ）

おもひとり（同みもき）九　れいをる世まての事あらいーてんとおぼーとり

おもひとる（源末つむ）廿八　さるりたのうーろみまてむぐゝまんとおもはーとりて

（同さりき）廿七　をむきおん事をおぼーとるまは（同夕霧）七十六　思ひとるのさおき心あるいいとあーきわざおりといひおらせ給ふ

おもひとゞめ（源紅葉賀）十四　まさまは人の思ひとゞめどや（同みをつくし）冊七　ふりうー

もおぼーとぐめどと思ひ給ふる

おもひとく（千載）秋下 行慶「雪ならばまがきのみまいつもらどとおもひとくまぞーら

菊の花（同）釋教 式子内親王家中將「おもひとくこゝろひとつになりぬれば水もへだてざりけり

おもひとまる（源さのき）九うちをてられてみおくらんも人わろきまゝちー給へば

おぼーとまりて（詞花）雜上 道濟「さびーさま家出ーぬべき山ざとをこよひの月まおもひとまりぬ

おもひをる（源末つむ）十四 みされさる心まい心もとおくおもひゐさる

おもひをでる（源紅梅）七 わが御姫君たちを人まおとらどとおもひをでれど

おもひわられぎ（源空蟬）八 あさまーくおぼえてともらくもおもひわられぎ（同帚木）廿二 さてもと覺ゆる折も時々おもひわられぎり（同空蟬）九 さー過たるやうなれぞえーもおもひわられぎ（同桐つは）八 きまーめに御心まどひ何事もおぼーめーわられぎこもりおわーまに

おもひわさる（源帚木）廿八 年頃おもひわさるてゝろのうちもきまえーらせん（同桐つは）廿二 なげらーうおぼーわたる

おもひわたぎ（源紅葉賀）十六 をのをのをんかゝるほどよりあけくれみーされバおもひわささるゝまやあらん

おもひわづらふ（源桐つは）廿八 春宮よりも御けーきあるをおぼーわづらふことありける（同夕ぎのは）八 いらませんとおぼーまづらへど（清輔集）「ちれるをーにぼへいられー梅の花おもひまづらふ春の風らむ（源帚木）廿六 そさあきものなどもありーまおもひまづらふで（万）五ノ廿八 おもひまづらひねのをーならゆ

おもひわぶ（源若紫）五 わらきさいしのおもひまびぬべきまより（同あけまき）九十四

おもひまぶる人々 補（新古）戀五 俊成「おもひまび見ーおもらげいさておきてこひせざりけむとりぞこひしき

おもひらいる（源うき舟）廿一 われいとーでろ見る人ともみおおもひらいりぬべきこちおんするとの給ひーを（同夕ぎのは）十八 とだえおらんをりおそいさやうまおもひらむりぬべきこゝちなんもるとの給ひーを

○おぼーらむる（源あけまき）六十四 さりともこよなういおぼーかむらどを（同やとり木）廿 よのぼどまおぼーらいりまさるらとでもおもひらいーきこえさせ給ひて

おもひやへに（源空蟬）二いとつらうもうれたくもおぼゆるまゝひておもひやへせと（同帚木）四十七をゝしきさまをみえ奉りてもあまゝゝかるべきあぢおもひやへに（後）六戀こと人まあひたべりてのちいやゝありけんむかしめの人におもひやへりてほどへまされば（源わかな）上、六十一いをゝしくおぼゝへにまもりかゝりにる

おもひやゝづらふ（源すゝむ）十四おのづからおもひやゝづらふほだゝのをもべるをなゝ（拾）冬貫之「おもひやねいもがりゆけば冬のよの川かぜさむをちとりかくなり

補（千載）哀傷頼孝「おもひやねきのふの空をながむれどそれやと見ゆる雲だまもあゝ

（同）戀三頼政「おもひやね夢まみゆやとやべさぜがうらさへ袖ゝぬらさゞらまし（同）戀四俊惠「おもひやねなゐまひぢまぞ歸りぬるうらをゝ末もとほらざりけり（後拾）哀傷棟仲「おもひやねやさみにそめゝをそめのおろもまさへもゑれぬるかな（千載）戀五雅頼「おもひやねてゆる關路まを夜をふやをそのとりまねをぞへつる（詞花）雜下圓融院「おもひやねかぐめゝやとりべ山むていけふりもみえぜかりまき（同）雜上道濟「おもひやねゑられゝのべをきてをればあさぢがもらに秋やせぞふく（同）雜下關白前太政大臣「おもひやねそなたのそらそながむればさゞやまのもまかゝるゝらくも

（新古）戀四、攝政太政大臣「おもひやねうちぬるよひもありかまゝ吹だまをさべ庭のまつ風（美濃家つと）初句ゝまちゑびての意なるを下にまつ風とある故まを例のことばをゝへたるかり（尾張家つと）是ゝおもふまたえゝねの意まを用るをそれゝめづらゝかり（万）十五、廿三「いもをおもひいのねらえぬまあきの野まさをゝゝなきつゝまおもひゝねて。タヘカテナリ

おもひやくる（源蜻蛉）四十七せり川の大將のとを君の女一の宮おもひやけさる（同帚木）卅七殿上かぐも思う給へゝれかぐら

おもひやまへ（源玉かつら）十三いをゝどき事をおもひやまへて出たつ（同あけまき）廿云々とおぼゝゝゝまふるを（同）廿六あゝろゝて人とくゝづめあどこゝろゝれるどちゝおもひやまふ（同とゝ姫）九朱雀院の大后のよこさまおぼゝゝまへて

おもひやけぬ（源帚木）七おもひやねぬさいもひとり出さるためゝどもおぼゝりゝゝ（同わかむ）廿八おぼゝゝけざりゝ事かれゝばつきせぜいをゝどうかん（金葉）雜上大峯まておもひやけぬ櫻のさきたりけるをゝて

おもひもやけぬ（拾）戀五、よみ八しらす「ありへんとおもひもやれぬ世中ゝ中〳〵身をぞかなゝざりける

おもひらけて（後）春上　おもてをたらりにやまとへことゝつきてまりけるほどゝやどりてもべりれる人の家のむすめをおもひられてもべりけれどもやむでとあきことゝよりてまりのぞりゝけり云々

おもひらけぞ（枕）三七　ゆづりものいとゞうふさやりゝつやめきたるいいとあをうきよげあるゝおもひらけぞゝるべくもあらぎ莖のありうきら〳〵ーうみえたる

おもひらぎる（源手習）六十　いまいかゝるかさゝおもひかぎりつるありさまゝあん

おもひらーづき（源とゝー姫）初　是をらぎりあくあをれと思ひらーづきゝこえ給ふゝ

○おぞーらーづき（源竹川）廿八　とりわきておぞーらーづき

補　おもひらひ（万代）春下花山院　「ねたーゝれよそゝのゝんさくら花おもひらひなくこぞもちりゝき

おもひよろこぶ（源手習）五十四　うせゝーー女子のらいりゝとおもひよろこびもべりて

おもひより（源桐つぼ）廿三　大和さうゝおぞーせておぞーよりにけるゝぢなれば（同夕のぼ）五十一　るて下りけるゝやとおもひよりける（同帚木）四十八　と君ゝいひるよりらくかんおもひよれいとの給ひちぎれり（同）四　うゝげふもをらーとおぞせぞ

おもひよりげさく（源まつ風）九　おもひよりげさくてうれーきこと共を見奉りそめても

おもひよらぬ（源夕顔）十三　此御あたりゝさふらいせんとおもひよらぬいかりゝり

おもひよらぎ（源よもきふ）十九　内おいおもひよらぎ狩衣姿なる男のーのびやらゝもてかーてかでやらかれば見おらいぞありにゝる目にて

○おもひもよらぎ（源末つむ）十八　たゞおもひもよらぎにいらゝてさる御こゝろもなきをぞおもひゝる　補（源藤とのま）六　うつさへにおもひもよらでとり給ふ

おもひよわる（源藤のうらい）初　關もりのうちもねぬべきゝーきゝおもひよわりたるゝ（同あのし）廿六　いらにせまーたいふれにくゝもあるらかーのびてやむらへ奉りてまーとおぞーよわる折々あれど

おもひよそへ（源東や）四十五　いとよくおもひよそへられ給ふ御さまをそれば（同わのあ）上ノ百三　猫を招きよせてかきいだきされば いとらうばーくてらうたげにうちかくもなつらーく思ひよそへらるゝぞをきーーきや（拾）夏よみ人しらす　「たゞ袖に思ひよそへて郭公花橘の枝ゝおくらん

おもひたばらり（源あけまき）卅四　らのいとほーく内〳〵ゝおもひさばらり給ふあり

さまも

おもひたれれん（古）秋上、よみ人しらす「百くさの花のひもとく秋のゝまおもひたれれん人あとゞめそ

おもひたぞる（源わかな）上ノ十四ーゝおもひたとるまよりあん

おもひさち（源夕きり）六十二猶世にへゞとふゝうおもひさちて尼まおりあんとおもひむすび丶れ給ふめれば

おもひたつ（源さゝき）四十一いゝやうまおぼーた丶せ給てゝうまいゝときこえ給ふ（同桐つぼ）廿四もゞ〳〵ーとおぼーた丶さりけるゆゑま（同帚木）十三あまにかりぬゝーとおもひたつゆどいいと心もめるやうまて

補 おもひたらもに（万）十三、長歌十一霞たつかゞき春日を天地まおもひさらいー

おもひたらぎ（源紅葉賀）廿三人もやゝつれんとくるーきを女いさもおもひたらぎ補（枕）四十、いさゝゝゝ何ともおもひたらぎつれあきゝ（同）九三、いさゝゝゝむづゝーともおもひさらぎ聞えかへー（同）十十八いとつれなく何ともおもひさらぬやうまてたゆめ過にもそゝー

おもひたゆ（後）懇二道雅「今いさゞおもひさえなんとはゝりゝ人づてならでいふよー

もゞか（源みをつくし）十九世にへんことゝおもひたえたり（同朝ぼらけ）十五人づてならで宣いせんあとをおもひたゆるふーまもせん（同紅梅）五十五まめやゝにおもゆーたえたるをもてなーて（同あけまき）四よづきさる方を思ひたゆべくおぼーおきて

○おゞーたゆたふ（源竹川）四數ならぬさまてみんむさ心づくーおるべき事をおゞーさゆたふ

おもひそめ（万）十八、十四「一もとのおでーおうゑーそのこゝろたれまこせんとおもひそめはん（古）懇四「あをゝ川ふちいせとなる世ありともおもひそめはん人いこそれド（拾）懇五、よみ人しらす（六帖）（万代）「紅のやーほの衣ゝくーあらば思ひそめぎぞあるべゝりれる

おもひつよう（落くゞ）をこーおこたりておもひつようておきゐてうちへまゐるべき日ミせ云々

○おゞーつより（狭）廿七、今いいゝでーばーながらへて行ひもせばやとこよおくおゞーつよりつゝ御ゆなどばゝりあおゞちまーてめーなどそれど

おもひつゝ（古）懇二小野小町「おもひつゝぬれば人のえつらんゆめとーりせばさめさらまーを（新古）懇一太上天皇「おもひつゝへまはるとーのゝひやあきたゞあらまー

の夕ぐれのそら

おもひつゞく（源帚木）四十五　まゝゝろえぬをくせさちそゝりける身をおもひつゞけて

ふゝ給へり（同）五十　をゞろにをさまどうおゞゝつゞけられるれど

○おゞゝつゝゝ（源桐つぼ）廿四　ゆゝゝしうとおぼゝつゝゝをて（同）十二　おゞゝつゝゝまぬよ

ゝもあらぬ御けゝきの心ぐるゝさに

おもひつらね（古）秋上　みつね「うきことをおもひつらねて雁がねのなきこをわされ秋

のよあゝ

おもひつく（伊勢物）四十段　おもひもぞつくとてこの女をほゝへおひやらんとに

おもひつき（源をとめ）廿六　もとよりいたう思ひつき給ふことなくてゝくまでゝゝづ

ゝんともおゞゝさち給ゝざりゝと思ひをてゝ置給ひゝおり

おもひつめ（源さゝのき）十七　かさゝゝおゞゝつめたるまとゞもの（貫之集）下（六帖）八

「年をのゝおもひつめつゝいまゝでにてゝゝろをあけることのあきゝな（伊勢物）いゝ

ゝゝものでゝゝ對面ゝて覺つゝなくおもひつめさる事をこゝもるゝさんといひけ

れば（源うす雲）卅一　あさまゝゝうのゝおもひつめてやゝ給ひゝゝ

おもひね（古）戀二　みつね「君をのみおもひねゝみゝ夢なればわがこゝゝろゝらゝつるな

りけり（狹）四下五　ゝう聞給ひてのちゝおもひねゝやあらん御門の御夢にも殿の御夢

ゝもとくゝもりゐさせ給もぎゝあゝゝりなんとのゝ打ゝきり御覽をれば補（千載）

戀二寂蓮「おもひねの夢ざゝ見えで明ぬればあゝでも鳥のねこそつらけれ（同）春上崇德院

「朝ゆふゝ花まつころゝおもひねの夢のうちにぞさきもどめける（万代）戀一有家「思

ひねの夢も空ゝくさむゝろゝ衣ゝゝさゝき明ゝゝゝねつも（月詣）釋教大輔「おもひねの夢

ゝもなどゝ見えざらんあゝで入ゝゝ山のもの月（万代）戀一、藻壁門院少將「おもひねの涙な

そへそよもの月くもるといもゞ人もこそゝれ（拾玉）六「かねの音ゝ今ゝ昔をおも

ひねの夢のまくらに聞ぞゝなゝき（同）七「いゝゝゝせん夢ゝも花をおもひねのさむ

るまくらゝゝ春の山風（續後拾）雜下、よみ人しらす「さりともとたのむゝつけてもゝゝあきゝ我

あらまゝのおもひねのめめ（拾玉）七「草まくらわゞおもひねの同ゞ夢を都の床ゝ

されゝ見るらん（千載）戀四丹後「おもひねの夢ゝおぐさむゝひなればあゝねどくれの

そらぞまゝさるゝ（續千）戀三經尹「おもひねの夢のゝよひぢゝゝらねばなげく心のほど

ゝ見ゆらん（同）同成兼「おもひねのまくらゝえゝおもゝゞゝ夢とゝりてもなぞ

こひゝき（同）同、よみ人しらす「もゝなくもたのゝれるゝなおもひねゝみるよの夢の契を

ゝりを

おもひねむぎ（源夕のほ）卅八いつの世よりありしかゝることをもそんとおぼし念ど
て云々出給ふ

おもひかほる（源まき柱）廿五いづくをまさ思ひ直るべき折とりまたん（同帚木）十八つ
らきこゝろをしのびておもひなほらん折をみつけんと云々（同わゐの紫）廿五よとゝも
よもゝさおき御もてあしをも覺し直る折もやと

おもひかほせ（源紅葉賀）六つひよいおぼしあはされかん（同わゐし）卅六我おもひの
りかふよいあらめかどおもひかをれに

おもひなりぬる（源うつ蟬）二あがらふまゞくこそおもひなりぬれ（同桐つぼ）五今
いなき人とひたぶるにおもひありかんとさりしうの給ひ（同）廿四うとましうのそよ
ろづよ覺しかりぬるよ

おもひかる（源すゝ虫）十三そかの人のそむきゆく世をいとをしうおもひなるおとものも
べりかがら（同うつ蟬）八いりゞいせんとおぼしかるものわろき御こゝろあさゝなめ
りりし

○おぼしかがさる（源すゝ虫）十まよひのあらさかる月の色よいゆに猶わが世の外
までこそよろづ覺しかがさるれ（同朝顔）廿このよの外のことまでおもひかがされ

○おぼしものながされぎ（源椎のもと）十六とものりくも身のからんやうまでいおぼしも
かがされぎ

おもひかざらむ（源わゐの紫）上四十八今いの世中をそかさまくに思ひかたらめて（同匂
宮）九御こゝろざまものふりく世中をおぼしなざらめしほどに

おもひあらふ（源やとり木）卅一またふたつかくてさるべきものよおもひからひさる

○おぼしからいぬ（源椎のもと）十九しばしよてもおくれたてまつりて世よあるべき
ものとおぼしならいぬ御こゝちどもよて

おもひなげく（源帚木）廿一いといたうおもひかゞきてもりなくかりもべりよしりば
（同）四十五親のおきてよたがへりとおもひなげきて（同あゐひ）十四たれも〳〵おぼし
かゞくよ

おもひかされ（源帚木）四十八あさくしもおもひかされねど

おもひかし（金葉）秋親房「さやはさいおもひなしりと月影をこよひとしらぬ人よと
むぐや（源帚木）卅九さらよあさくいあらゞとおもひなし給へど云々（同わゐし）廿七雨
かどふりそらさざれさるよい思ひかしかるることいさぞむべる（同うつ蟬）二よりよ
ひさるもおもひかしかやあむれかり（同桐つぼ）廿五おもひかしめでたう（榮玉の村

菊）廿三　こよかう立まさらせ給へりおもひあーまやとまでなん（拾玉）一「ほとゝぎ
ゝ花さち花ゝかく聲ゝおもひあーにやかつらーきゝかな 補（源のけろふ）おもひあー
らそりからゝとおぞーて（月詣）十覺綱「神無月おもひあーにやすゝよーゝ松ふく
風もゝさゝゝさびーき（源さのき）廿九あてにゝざゝきゝおもひあーかるべー
○おぞーかびく（源うき舟）六十たゞ御こゝろの内ゝそこーおぞーなびゝんかたをさ
るべきゝおぞーからせ給へ

おもひかす（源うつ蟬）七女ゝさかそわそれ給ふとうれーきゝおもひかせど

おもひかぎらへて（源まつ風）十天ゝうまるゝ人のあやーきこつの道にゝへるらん
一時ゝおもひかぎらへて（同みとつくし）廿四かたゞけかくとも昔の御なでりゝおぞ
ーなぎらへて

おもひむつぶる（源夕顔）五ゑたーくおもひむつぶるそぢゝ又かくなんおもゑえー

○おぞーむづゝる（源をとめ）五十とりゝへさまそーうよろづをおぞーむづゝりける

おもひむつび（源末つむ）廿六たのもーき人ゝいうとゝらそおもひむつび給ゝんこそ
ほいあるまゝちそべけれ

おもひむせび（源松のせ）十三世ゝなくかさめゝーうまばゆきこゝちそればおもひむ

せびつるこゝろのやみもむるゝなり

○おぞーむそぞゝる（源あふひ）五十一くるーうわりかきものにおぞーむそぞゝれて

おもひうとむ（源うき舟）四十二かゝるうき事きゝつけておもひうとゝ給ひなん（同
わこの紫）廿四いとゞおもゑーうとむかめりゝー

おもひうる（源うつ蟬）十二御せうそこもなーあさそーと思ひうる方もかくて（同蜻
蛉）初めのとよりむゞめてあわてまどふことかぎりかー思ひうるゝさかくて（同
帚木）十一わゲこゝろとおもひうることかく深きいさりなゝらんゝいと口をーくたの
もーげなきとゲや猶くるーゝらん（發心集）四ノ廿一やもめかれゞ申あゝそべき人もか
ーわゲ身ゝ女ゝて力およびむべらぎとなり里の人ゝまたかぞりまこそあそれと
とひむべれ神の事ーげきわたりかれば誠ゝゝいゝゞゝむべらんとゝかくゝおもひ
うるゝたかくてなんといひもやらぎさめゞーとかく

おもひうれ（源まき柱）廿五年でろおもひうれ給ふさまきゝわたりてもひさーく
かりぬるを

○おぞーうゝる（源あふひ）十八ひとふーゝろーとおぞーうれゝーこゝろーづまり
ゲさう

おもひうつる（源わけまき）卅六。大君心さされぞよおもひうつりまけりとうれしくて

○おもひもうつる（源うき舟）廿三わりきこゝちまいおもひもうつりぬべし

○おぞーうつろふ（源蓬生）四いとうものおそろしーうらぬ御をまひまおぞーうつろいん

○おぞーうづもる（源末つむ）廿一さうどこの物もいもでおぞーうづもれ給ふらんさまおもひやり給ふもいとほしーはれい

おもひうんど（源わふひ）十いうまおぞーうんどけんといとぞーうて（同のしい木）

卅四うむづく所おう思ひうんどて（伊勢物）百二段あてある女の尼まおりて世中をおもひうんどて

おもひうーろむ（源わけまき）十六こゝろのうぎりおもひうーろみてん（同さわらひ）

六さてもおいーまさんまつけてもまことまおもひうーろをきこえんうたい

おもひのいろ（古）誹諧おもひのいろのしたぞめません

おもひのいへ（拾）哀傷よみ人しらす「よの中にうーのくるまのおうりせばおもひのいへをいうで出まー（院千首）近衛院御製「わゞこゝろこつの車まうれつるいおもひの家をうーとおうりけり

おもひのぞる（源繪合）十一うくやひめの云々此世の濁りまもけゞれぞはるうまを思ひのぞれるちぎりたうく（同）十三「雲のうへまおもひのぞれるこゝろまい千ひろのそこもとるうまぞとる（同梅の枝）二十いみどうおもひのぞれどあゝろにもうないぞ

おもひのぞう（源帚木）八いうゞおもひの外まをうーうらざらん（同よこ笛）七、女三ト柏木トノ「此人のいで物ー給ふべきちぎりにてさるおもひの外の事もあるまこそいありけめ（新後撰）雑中小倉山莊おもひの外おることいできてをまぞありまけるころ歌云々公雄その後ほどおくうへりををもべりけるをよろこび（源帚木）八さびーくあをれたらん葎の門まおもひの外まらうまゞならん人のとぢられさらんあそうぎりあくめづらーくいおぞえめ（同わの紫）卅八を帳のうちまうきいざきて入給へバあやーう思ひの外まもとあきれてされもくるさり（拾）春、兼盛「わゞやとの梅の立枝やこえつらんおもひの外まを君ゞきまをせる（伊勢物）八十三段うくーつゝまうでつうまつりけるをおもひの外まを御ぐーおろー給ふてけり

おもひのどむ（源まはろし）十三さまでおもひのどめんこゝろふうきこそあさはまおとりぬべけれおどのたまひて補（源夕きり）卅九今すこーこづうらもおもひのどめ又ーづまり給なんままゐりこむ

○おぞーのどむ（源うつせみ）三さのみもえおぞーのどむまどりけをば

おもひのつま（清輔集）「たちぐさきおもひのつまはつあげりて引らへさるゝこと

ぞらあーき（後）雜一行平「かぎりあき思ひのつまのなくばてそまさきのらづらよりも

あやまめ

おもひのまゝ（源東や）五十おまたらざちやをく思ひのまゝはぞをこーありはる（古）

戀三小町）下六十五おもひのまゝはもえまぎれありらを（同御法）三たぐうちあさへたるおもひ

のまゝは道心おこは人々はいこよあうおくれ給ひぬべらめり

おもひのこは（源わの紫）四かゝる所はをむ人こゝろにおもひのこをとといあらど

らーとのさまへば（同末つむ）五いらはおもぞーのあを事あららん

おもひのみち（夫）廿一忠定「めく末のをたえの橋はきくもうーおもひの道のおくもー

られて

おもひのひらく（堀次）「もろ人の花みんとるのもどめとやけふはおもひのひらけ

ぬるらあ

○おぞーおぞるゝ（源わらあ）下六十三いとあさまーうつゝともおぞえ給はぬにむね

ふさげりておぞーおぞるゝ

○おぞーおどろく（源わのー）廿七さやうはおぞーおどろくまどき事ときこえ給ふ

おもひおとり（源紅梅）三さりとておもひおとりひげせんもらひあらるべー

おもひおとを（源みをつくし）三むらーより人はおもひおとー給へれどもづらら

のてゝろさーのまたなきあらひは（同をとめ）七われよりは下らうとおもひおとー

さりーだに

○おぞーおとは（源竹川）廿八おぞーおとーはるよと

おもひおよび（源みもき）十二宮づらひはさるべきをぢにて上も下もおもひおよび出

さつこそ心たらきあとなれ

おもひおく（源帚木）十三つひのたのゑ所にはおもひおくべらりはる補（新古）旅西行

「おもひおく人のこゝろはたれて露わくる袖のらへりぬる哉（續千）秋上躬恒「故

郷をおもひおきつゝくる鴈のたびの心は空はぞ有はる

おもひおくる（源わのあ）下九十五いはーへよりぞいふらき道にもたよりうをらるべき

女方はたゑをおもひおくれつゝ

○おぞーおこさる（源帚木）四十七君はおぞーおこさる時のまもおくこゝろくるーく

もこひしくもおぼしいづ（同末つむ）廿二あれたる宿いとあれまおぼしおてさら
ぜながら

おもひおこし（竹取）十四是を見て内外なる人のあゝろとも物まおそいるゝやうにて
相戰いんこゝろもあらりけりゝらうゞておもひおこして弓矢をとりさてんとそれ
ども（源みもき）十一猶ゝうおもひおこせるついでまとあんおもう給ふる（空穗くら
開）下十五五少將御ふゝをみて驚きあげらくるしきこゝちをおもひおこしてまゐりさり
（源よもきふ）廿二ゝくぞりわけ入さまへるゞあさゝらぬまおもひおこしてぞその
ゝまきあえ出給ひれる（枕）八四うちやましきもの、稲荷におもひおこしてまゐりさる
まの中のやしろのほどわりあくくるしきを云々

○おぼしおこし（空穗くら開）中四十ノ年でろ御ぜんをゞ常まあゞきゝこえさせ給ふそ
れをおもほしおこして聞えさせ給ふあり（源あふひ）十六いとゞしう覺しおこしてわ
たり給へり

おもひおこせ。コレハカナタヨリ思ヒオコスナリ（源まつ風）十五又ゝしこにいいゝまとまりておも
ひおこせ給ふらんと御（更科日記）四十ゝくてながむらんと思ひおこせる人あらんや
などいひて「山深くたれゝおもひいおあれべき月みる人ゝ多ゝらめども（和泉式
部集）月おもしろきまに京をおもひやりて「見ることゝおもひおこせて古郷のこよひ
の月をされあげむらん

○おぼしおきて（源桐つぼ）廿三源氏まあしてを奉るべくおぼしおきてたり（同まも
きふ）廿五おまやゝまおぼしおきてさるま

補　おもひ〳〵（山家）下「そをれさくよこのゝつをあ生ぬれゞおもひ〳〵まに人ゝよ
ふあり（月詣）四小侍從「ほとゝぎれはまてどきあゝをいざゝらゞおもひ〳〵まに行てさづ
ねむ（躬恒集）「とゝをへておもひ〳〵てあひぬれゞ月日のをこそうれしゝりれ
おもひくむへ（源あけまき）五十三ゝづゝらざにあゞかゝることおもひくむへゞとい
よいよふゝくおぼれ

おもひくたく（源のしゝ木）卅二云々あどゝりあつめておもひくざくま

おもひくたを（源帚木）五そらまいゝゞいおしむりおもひくたさん

おもひくづほれ（狹）二四上十五月頃おもひくづをれつるむねの内どもあきてうれしく
いみゞきに

おもひくつし（源椎のもと）卅いゝまうひ〳〵しくふるめきたらんあどおもひくつ
し給へり

○おぞーくーて（源夕きり）すくせうくおぞーくーて

おもひくらべ（源やとり水）卅世のうきよりハなぞ人ハいひーそもさやうよおもひくらぶるこゝろもことよなくて

補 おもひくむ（赤染集）ひやゝゝゝかるおもひくそよおきへまゝるぞといふ

おもひぐまなー（源あけまき）ことさらよもいとむーき身をと聞給へどおもひぐまなくのさまハんもうさてあれば（同わのあ）下七十六ゝくおぞーまどふめるよむなーく見かされ奉らんゲいとおもひぐまなゝるべければ（同みもき）一何事よつけてもきハきハーくをこーもかたハかるさまのことをおぞーゑのむきなどものー給ふ御心さまそさておもひぐまかくけざやゝかる御もてかーかぞのあらんにつけてハをこゲまーうもやかどおぞーゝへさふ（枕）十一五むねさゝあぞに見せでゝくーておろせと宮の仰らるれば來たるよおもひぐまなきとてひきおろーてゐて參り給ふ（源竹川）十九「さくらゆゑ風よこゝろのさわぐゝなおもひぐまかき花とそる〳〵（千載）秋上月毎秋友といへるおゝろを俊頼「おもひぐまなくても年のへぬるゝかな物いひゝもせ秋のよの月（狭）一上いでやむさーのゝよるの衣あらまーゝば夕よゝへまさりよもやおぞえまーとおもひぐまかき心ちそれどいさうゝーこまりて（枕）七五行成詞おもひぐまかくあーうーたりあど例の女のやうよいもんとこそおもひつるよとていとゞうわらひ給ふ（後）戀三後薦あひーりてむべりける女のこゝろからぬやうよこえむべりければつゝハーける「いづゝたよたちゝくれつゝみよとてゝおもひぐまなく人のなりゆく補（散木）「世の中ハおもひぐまかきものなれやたのむ身をーもいとふとおもへば（同）「をーめぞもあゝーの浦よ照月のおもひぐまなくかたふきよけり（中宮亮（堀太）月肥後「月影を心よ入てをーめどもおもひぐまなくゝさふきよけり（中宮亮顯輔家歌合）長承三年新中納言「あゝかくよをーむもーらぎゝさふくもおもひぐまかき秋のよの月（源わのあ）上いとうさておもひぐまかき御ことゝかゝ（紫式部集）「をりて見ば近まさりせよ桃の花おもひぐまなきさくらをーまド（源やとり水）廿三おどてむゝーの人の御心おきてをもてたゲへておもひぐまかゝりけんとくゆる心のみまさりて（狭）一上人をばいたづらよかい奉るべき事ゝハおもひぐまかきやうなる心いられの心つきかさハ（源藤とのま）十「いとまゲ〳〵ーきをぢよもおもひより給ひけるゝかいたりふゝき御心からひからんゝー今おのづゝらいづゝたよつけてもあらハならんことありかんおもひぐまかーやとゝらひ給ふ（拾玉）八「おもひぐまん人ハ中々なきものを哀よ犬のぬーをーるらん（狭）四上ゝみかきくらゐにやなり

給ハんのたのミをゝけてこそうち〳〵のくるしさをバおぐさめても過し給もめお
もひぐまおうてハ何のゝしこゝるべきぞ又おのゞやうならんかんたちめハをきま
なきやうにてもおほくちをしき御ありさまこそ侍らめ（源竹川）十九櫻もゑ風まこ
ころの云々玉小櫛云思ひぐまおきハ思ひやりのおき意まてこゝまてハ此櫻の妹の
君の方ゐよりて姉君のためまおもひやりのおきおり（千載）秋上おもひぐまおくて
も年の云々季吟抄云源氏總角卷まこと更まもいとむしき身をと聞給へど思ひぐま
おくの給むんもうさてあれバとあり思ひゞひもおき心云々此歌も思ゞひもおき身
にて年をへしまの月ハ多秋の友なれバ物いひゝむし慰めよとおり

おもひぐさ（千載）戀一國光「日をへつゝしげさハまさるおもひ草あふあとのむものおど
おゝるらん（新古）戀五通具「とへゞしおを花ゞもとのおもひ草しゐるゝのべの露ハい
ゝまと補（新千）戀四小大進「夏山のしげゝゞしたのおもひ草露しらざりつ心ゝくとハ

おもひやり（土佐日記）ねふハゝやこのみぞおもひやらるゝ（源末つむ）廿二おもひや
りをくあう御心のまゝならんもことわりとおもふ（同帚木）八父のとし老ものむつ
ゝしげまふとりをぎせうとの顔にくげまおもひやりことおることとおきねやのうち
に（同夕ゐは）立さまよふ下つゝさおもひやるま（拾）冬能宣「わゞやどのゆきまつけ

てぞふるさとのよしのゝ山ハ思ひやらるゝ（源よもきふ）六盗人おどいふひさふる
でゝろあるもものもおもひやりのさびしれれバまや此宮をバふようのものまふゝをを
ぎてよりこざりけれバ（同末つむ）廿一おゞしうづもれ給ふらんさまおもひやり給ふ
もいとほしけれバ（同帚木）廿さをゞまわゞ見をてん後をさへおんおもひやりうし
ろをたりト（同みをつくし）十三人のこゝろよりゐゝおるおもひやりでとして物ゐん
ドあどし給ふま（同末つむ）廿いゝまま思ふらんとおもひやりもやをゝらを（同ゐふ
ひ）四十ひとへまおもひやりなき女房おどもけふをゝぎりまおゞしをてつる故さと
とおもひくつして（同さのき）五十よもさるおもひやりおきわざし出られドとおん
（狭）三上廿二ゝうまでおゝろおくれおもひやりなきわざし出給ふべしとハおもハざり
れる（源わの紫）四十七いとおもひやりおきゐどのことまもべれバさふらふ人々くる
しくむべるべし補（友則集）「わゞ心いつおらひてゝ見ぬ人のおもひやりつゝこひ
しゝるらん（土佐日記）「おもひやるこゝろハ海をゐたれどもふをしおれれバしら
ぎやあるらん（源わのお）十六女君もおもひやりなき御心ゝおとくるしゞりたをふ
（万）十二、十一「念八流さときもゐれハ今ハおしあし妹まあハぎを年のへもけバ（古）秋下秋の
むつるこゝろをたつた川をおもひやりてつちもき「としでとまもをぢバなゞるさ

つた川とかとや秋のとまりなるらん（寛平歌合詞書）左方右手の菊ハ云々いま九本をバそもそもをつくりてぞ〜さる其をもそもまのさまハおもひやるべ〜（拾）雑懸、天暦御製「きみをのとおもひやりつゝ神よりもこゝろのそらゝおりゝよひりな（同）同貫之「おもひやるこゝのゝら山ゝらねどもひとよも夢ゝとえぬ日ぞおき（後拾）賀藤三位「おもひやれまだつるの子れおひさきを千よもとかづるそでのせゞさを（和泉式部續集）「もゝぢバもまゝろゝ霜のおれる朝ハこゝのゝらねぞおもひやらるゝ（風雅）旅貫之「とゞく行君をおくるとおもひやる心もともゝ旅ねをやせん（兼輔集）「りハりかん世ゝハいりでりをまふべき思ひやれとゆりぬまゝろを（千載）春下、式子内親王「ながむれバおもひやるべきかたぞかき春のりぎりのゆふぐれの空○廣足云こハ思ひをやりもらゝ方かきかり（同）戀二師光「こひゝとも又つらゝともおもひやる心いづれりさきゝさつらん（詞花）雑下、太政大臣「おもひやれ心の水の淺ゝれバりきかゞをべきまとのもかゝ（万）一八まをらをとおもへるわれも草まくらたびゝゝあれバ思遣（オモヒヤル）さづきをゝらゝ云々○コハ思ヲヤリハラスヿ也

○おゞゝやり（源夕かほ）廿八内をおゞゝやりて

おもひやりふりきひと（源蓬雲）三尼君おもひやり深き人ゝて○注遠慮ある人かり

おもひやむ（拾）戀三、よみ人しらす「梓弓をるのあらゝを打りへゝおもひやゝゝ人ぞまひゝき（源さゝのき）廿一御いのりをさへせさせ給ひてまの事おもひやませ奉らんと（同をとめ）卅四さてれおもひやゝをなんとおもへど

おもひやすらふ（源夕ゝのほ）廿二ゆくりなくあくがれんまとゝバ女ハ思やゝらひ（同さゝのき）十三大后も參り給ハんとゝるを中宮のりくゝひおもゝるゝまゝろおりれゝおゞゝやすらふゞゝ

おもひまハを（枕）四九、らんゝやうの花の時錦帳のもとゝりきて末ハいりに〜とあるをいりゞすべりらんおまへのおハしゝまさバ御らんせさゝべきを是ゞ末ゝり顔ゝさど〜ゝきまんかわかきたらんもみぐるゝなどおもひまハにほどもかくせめまといせバたゞゝそのおくますびつのきえゝる炭のあるゝて草のいゞりをたれりたづねんとのきつけてとらせつれど云々源中將の聲ゝて草のいほりやある〜とおどろ〜ゝうとへバなどてりさ人げかきものハあらん玉のうてかもとめ給ハまゝりバいできこえてまゝといふ云々御名ハいまハ草のいゞりとかんつけたるとていそぎゝさち給ひぬれバいとわろき名の末まであらんまそくちをゝりるべけれと云々（源さりき）三五十さバりりの人ハおゞゝたゞりるべきぞりゝされど云々おゞゝもまハさ

ぞなりて（同夕ゝは）卅三おのづゝらゆきまゝより物まぎるゝ事もべらめとおもひまゝて昔み給へ一女房の尼ゝてもべる云々

おもひまどふ（源とし姫）三宮あさまゝく覺一まどふ（同桐つは）七いゝさまにかとおぢ一めゝまどゝる（同帚木）四こゝいゝかあるあとぞとおもひまどゝるれど（同さゝき）十足そそらゝおもひまどふ人おぢゝり

おもひまげへ（源あゝし）十六そそゝれ給ひゝ故郷の池水ゝおもひまげへられ給ふゝ（同ことふ）二十あやゝうさゞそれゝとおもひまげへらるゝ折〳〵あそあれ

おもひまよふ（源わゝか）下十七みづゝらのてゝろゝゝ何ぢゝりおもひまよふべきゝゝあらねど

おもひまつそに（源帚木）廿七おもひまつゝにけゝきもべらまゝゝゝ

おもひまうけ（枕）二廿三歌かどよむゝやあらん兵衛佐ゝへ一思ひまうけよかどわらひて（源葵）五御もぎのこと云々おぢ一まうくる御用意かど（同東や）四こゝろひとつゝおもひまうけて（同）そかたゝとおもひまうけて

○おぢ一まさる（源竹川）卅八あゝれにのみ覺一まさる

おもひまぎる（源やとり木）三十おもひまぎらゝ一つるを（同桐つは）廿五おぢ一まぎるるとゝかれれどおのづゝら御こゝろうつろひて

おもひまどる（源ゝしゝ木）九あかくちをゝ一や思ひまどるゝさかくてみ奉らまゝゝゝめづら一くうれ一ゝらまゝとおぢせど

おもひまを（源やとり木）卅六あせちの君とて人よりゝことゝおもひまゝ一給へるゲ局におもゝ一てその夜ゝあゝ一給ひつ（同紅梅）十二此君も東のをゞやんでとかくむつまゝうおもひまゝ一ゝり（古）春下人しらず「まてといふゝちらでゝとまる物からゞ何をさくらにおもひまさまゝ一（源やとり木）四十七又おもひまに人かき心のとまりにてこそゝゝあらめかど（拾）戀四人しらず「おもひまを人一なれゞまをゝゝゝみうつれるゝ夕とねをのゝぞかく

おもひけち（源さゝき）卅九けふゝ此御事もおもひけちて哀かる雪の雫ゝぬれ〳〵行ひ給ふ（同あふひ）十八ゝゝなき事の折ゝ人のおもひけちなきものゝてかにさまかりゝみそぎの後（同うす雲）廿四おもひ給へけちて一をさらゝまゝゝろよりいざ一そべりぬることゝゝかく〳〵きこゆるゝどに

おもひふを（源紅葉賀）廿八君ゝいとけおそろ一くみつけられぬることゝゝおもひふ一給へり（同あけまき）廿九いゝなりけん事ゝゝゝとおもひふ一けり

おもひで（空穂俊のけ）上父母のおもひ子まてゝた時も見え給いねいおゞーさわぎ給ふ子あり

おもひとゞるゝ（源玉のつら）四涙たゆる時なく娘ぞもゝおもひとゞるゝそ（同うき舟）廿時のまゝみざらんいーぬべくとおゞーとゞるゝ人を（同このけろふ）廿さるまゝき事をおもほーとゞるゝ事とみゞるしくゝ奉れど

○おゞーあのむ（源をとめ）九かゝるゝさざまをおゞーてのみて

おもひあゝろさを（源やとり木）八ゝくおふなゝ思ひこゝろざーてとーへ給ひぬるを（同さのき）十父おとゞのかぎりあきをぞまおゞーこゝろざーていつき奉り給ひーありさまゝりて

補 おもひこひ（万）十九、廿八さゞまあゝを日のゝさあれゞ思戀（オモヒコヒ）いきつきをるま

おもひこめ（後）戀三平中典「こひーきもおもひこめつゝあるものを人まーらるゝ涙かりれり

補 おもひてを（續古）秋上頼政「いでぬまの山のあかさをおもひこにこゝろやさきま月をみるらん

おもひえたり（源まほろし）八若宮丸ゞさくらゝ咲まけりいゝでひさーくちらさゞ木のめぐりまに几丁を立てゝさびらをあげぎゝ風もえ吹よらゞとゝーこうおもひえたりと思ひての給ふ

○おゞーえらび（源わかな）上ノ廿八よゝーきまおゞーえらびて

おもひえさらむ（枕）五、六。小兵衛が實方まの歌よみかけられたる所四人をゝりへゞてゝゝるたれゞよくおもひ得たらんまもいひまくー

おもひで（後拾）戀三、和泉式部「あらざらんこの世の外の思ひ出まいまひとたびのあふこともがな補（新古）雑上光行「心ある人のを秋の月をゝゞ何をうき身のおもひでません（古）春上、よみ人ーらす「ちりぬとも香をざまのあせうめのをなこひーき時のおもひでませむ（千載）雑上、久我内大臣「かくをゝりうきよの中れおもひでまは見よともをめるよゝの月ゝる（同）同、覺審法師「過さまーよをぢのはるの夢のよゝうきより外のおもひでぞあき（同）雑中仁和寺法親王守覺「おもひでのあらゞ心もとまりかんいとひやをきゝうきよかりけり（後拾）夏公資「あづまぢのおもひでにせんゞとゝぎに老そのもりれよその一聲（詞花）雑上、琳賢法師「あゞらへゞおもひでませんおもひ出よ君とみゝされ山のものつき（同）同伊通「いまゝさゞむゝーぞつねまこひらるゝのこりありーをおもひでにーて（同）雑下正言「思ひ出もあき故郷の山かれぞゝくれゆくもたあゝれかりれり（拾玉）五

「月をのゝおもひ出よりるうきゝろあこゝとゝもこゝぞもをゝすての山

おもひあもれ（源手習）四十ものゝけもさこそいふかりゝろとおもひあいをるよ補六

（新古）戀三、入道前關白太政大臣「われをゝりつらさゝゝのゝ人やあると今世にあらばおもひあもせよ

○おゞゝあもれ（源桐つぼ）廿三相人いまあとにゝゝこゝりれりとおゞゝあもせて○覺ショリニケルナリ（同帚木）五われもおゞゝあいをる事やあらんうちゞゝゝゝみて

おもひあへぬ（源東や）五十九まだおもひあへぬほどかれば心さわぎていゝかるこゝと

ゝゝあらんといひあへり○注思ひもよらぬのこゝゝろかり補（新古）夏、八條院高倉「一聲ゝ

おもひぞあへぬゝゝとゝぎれゝさそがれ時の雲のまよひよ

おもひありき（源紅葉賀）卅女ゝかほいとえんようらをのくるをわびゝと思ひあり

き給ふ（同同）十三此宮をたにゝぎゝゝくてみ奉らぬやとおもひありくよ（同総角）六十六

あいかくものをおもひありき給ふ

おもひあとて（榮見ぬてぬ夢）廿五北方の御せうとの何くれの守いゝかるべきよゝと

思ひあわてたり

おもひあゞる（源帚木）八れもひやりおとなることなき閨の内よいといさくおもひ

あゞり（大和物）三いといたう人々けさうゝれをおもひあゞりて男かどもせでかんありける（源桐つぼ）初むゝめよりわれゝとおもひあゞり給へる御方〳〵めさまゝきものよおとゝめそねを給ふ（同帚木）卅五おもひあゞれるゝゝきに

○おゞゝあゞむ（源こてふ）六おとゝの君もわざとおゞゝあゞめきあえ給ふ御けゝきかどをお世よきこえいでゝ

おもひあゝを（源あけまき）卅二よもをゝがらおもひあゝゝ給ひて

おもひあつゝひ（源東や）二いゝで引をゝぐれておもゞゝゝきゞどよおかゝても見えにゝゞゞなとあけくれ此母君ゝおもひあつゝひゝる（同あけまき）六十五いゝで人らゝうゝみなゝ奉らんとおもひあつゝふをこそ補（好忠集）「のどゝにてすゞゝりけり夏の日もおもひあつゝふこともなき身ゝ

おもひあつめ（源さゝのき）六こゝらおもひあつめ給へるつらさもきえぬべゝ

おもひあかづる（源帚木）四十三つねゝいとすく〳〵〳〵くこゝろつきかゝとおもひあかづる伊豫のゝさのみおもひやられて（同玉のうち）十三なおゞゝあかづりそとて

おもひあかぐりて（蜻蛉日記）下、中小弓おもひあかぐりて念せざりけるそいゝからんとおもひされがさいそよ出てもろ矢ゝつ

おもひあらたむ（源あけまき）廿四さいえおもひあらさむまど

おもひあくがるゝ（源よもきふ）八中〳〵よき人のまねまこゝろをつくろひおもひあがるもおほゝるを

おもひあまり（源帚木）十こゝろひとつにおもひあまるおとあどおほゝるを（伊勢物）五十六段昔男ふゝて思ひおさておもひおもひあまりて

○おぞゝあまり（源とこ夏）四わびさせ給ふつらさをおぞゝあまり

おもひあて（源のしい木）十子もちのおまへのもの女房の中まも品々におもひあてたるきゝゞ〳〵（空穂樓の上）下四おもひあてにゝのこ給ひゝ手よりゝいとなまめゝゝうあてにゝきたれどそれなめり夕にまゞへる心ゝあとおぞゝ（源夕のは）七いとゝるくおもひあてられ給へる

おもひあき（源のしい木）四十四などでそるめまより人をもおもひあきまたさるまど

きまあゝろそもまどゝにべきぞ

おもひさわぐ（源あふひ）廿八又おぞゝさわぎて御いのりなとせさせ給ふ

おもひさざむ（源帚木）九えなんおもひさざむまどゝりける（同桐つは）卅三行さきもいとさのもゝ夕なる事とおぞゝさためて

おもひさまを（源椎のもと）廿五あさまゝう今までなげらへもべるやうなれどおもひさまさんゝたなき夢まどもれもべりてあん（同うす雲）卅五これゝいとまげなきことなり云々おぞゝさまにも（同夕のは）十六さまでこゝろとゞむべきことのさまもあられぞといとゞく思ひさまゝ給ふ

おもひきぞふ（源よもきふ）九われもいゝで人よりさにまふゝきこゝろざゝを御覽ぜられんとのみ思きぞふ

○おぞゝきざに（源梅のえ）十一此たびのおぞゝきざにきまのいとまとなれゞ

おもひきゆ（古）冬忠岑「ゝら雪のふりてつもれる山里ゝ住人さへやおもひきゆらん

（同）同躬恒「雪ふりて人もゝよもぬ道なれや跡もゝなくおもひきゆらん（後）冬よみ人しら「故郷の雪ゝ花とぞふりつもるなげむるわれもおもひきえつゝ（源末つむ）六す

いでやいとゝもゝなる有さままおもひきえてまゝろぐるゝげまものゝ給ふめるを

おもひゆるを（源あのし）十六をゞろなりとおぞゝせど人ざまのあくまでおもひあがりたるさまのあてなるまおぞゝゆるゝてを給ふ（同夢のうきまし）十八さま〳〵のつまおもき御てゝろをゝ僧都におもひゆるゝ聞えて（同よもきふ）廿一年でろのおこさりもさなべての世におぞゝゆるをらん

おもひゆづる（源東や）六思ふ人ぐーたるいおのづらとおもひゆづられて

おもひめぐらせ（源帚木）九せべき内のあるドとをべき人ひとりをおもひめぐらを

ま（同）卅思ひめぐらせべ（同うつ蟬）八いろまーてかゝる事ぞとのちま思ひめぐら

さんも（同まはろし）十二とざまろうざまに思ひめぐらーゝに（同帚木）廿八あにおとを

とり申さんとおもひめぐらをま（同）卅二かたき詩のこゝろをおもひめぐらー（同

夕顔）卅うちおもひめぐらをまこゝたろあさけどをくうとまーきに

おもひこる（源まきはしら）二おをろ夕あらぬ契のほどあもれまうれーくおもひこ

るまゝに

おもひこざれ（古）戀一、よみ人ーらす「ろりでものおもひをたれてわゞこふと妹ーるらめや

人ーつ夕ぎべ（源えし姫）四十一返〳〵もちらさぬよーをちろひつるさもやとまさお

もひこざれ給ふ（同帚木）四十八あぢきなく夢のやうまぎまーな夕きを又やくもへ

んとおもひこざれて

おもひこなる（源わゝな）上、四十三もとよりおもひこなれたる人

おもひドに（大和物）五これをおもひドまゝかさたらまふせをてーまけり

おもひーりさまへ（宇治拾）十四、廿三いろでとー頃の君のかゝることありて俄まのをり

給いんおくりせでいあらんおもひーり給へ約束をべさゞふまドきぞなどをろされ

ぬれべ

おもひーる（源帚木）廿四七とせあまりのをどまを思ひーりむべりなん（同）廿六つらきを

も思ひーりけりとをえんいわりなくゝるーき物と思ひさりーろべ（同桐つぼ）九物

思ひーり給ふいさまろさちなどのめでたろりー事あゝろをせのなたらろまめやを

くまくをがたろりー事など

おもひーそれ（源帚木）廿六むタまを思ひーをれて心をそろりれれべ

おもひーれる（源夕ーのは）十三をこーものゝこゝろおもひーるハいよ〳〵おろろまお

もひきあえん（同さーのき）四十七おもひーれとや此度のつろさめーまもゝれぬれど補

（續拾）夏、後京極「おもひーれありあけゞさのをとゝぎにさこそいされもあろぬならひを

おもひーづまり（源帚木）廿三とけゞさくもづろータにおもひーづまり給へるを

おもひーづめ（源夕ーのは）卅六ろのふるさと人まつタやらんと申せどをべーおもひー

づめよ事のさま思ひめぐらーてとなん（同みをつくー）十八などたぐひあらドといみ

ドうものをおもひーづみけん（同とゝきゝ）卅一なまのあやめもおもひーづめられぬま

（同みをつくし）十七所せき御身まおをーもぐろるまそへて云々思ひーづめ給ふなり

れり

おもひしらぬ（源うつ蟬）八世の中をまた思ひしらぬほどよりハ（同）世をおもひしりぬれば

おもひしらる（源橋姫）卅猶思ひもあれゞたき世なりれりと心よわくおもひしらる

おもひしむ（源桐つぼ）六いとあもれとものをおもひしをなゞら

おもひしのぶ（源螢）九おのづからおもひしのびゞさきは折〳〵人み奉りつれば

おもひしめ（源さゝのき）廿四昔よりおもひしめきこえてし心のおもひあしはやさまことにいとゞうねびまさり給ひはけるらなと（同）四十三思ひしめてしことハさらは御心はもなれねば

おもひしめる（源わかな）上ノ百三衛門督ハいとといたくおもひしめりて（同ととめ）廿九女御の世中おもひしめりてものし給ふをこゝろぐるしうむねいたきに

おもひもよらぬ（源東や）五十九はハらはくおぼしたむらるらんとハおもひもよらぬ（同うき舟）十七忍ひたれゞおもひもよらぬらいもなつ補（玉葉）春下、堀川右大臣「ちりぬべき花をのこまそ見はきつれおもひもよらぬ青柳のいと

おもひもあへぬ（源あけまき）四十三只今らく思ひもあへぬもづらしき事ぞもまとされおもふべくハさらはおもひられもべらざりしは補（金葉）夏顯季「夏でろもすその草をふく風はおもひもあへぬ鹿やなくらん（新千）夏、入道二品親王性助「そゞろよハおもひもあへぬほゝとゝぎは明行そらはもつねなくなり

おもひもて（源をとめ）四十三かゝる人をも人ハ思ひもて給ハさりけり（同玉鬘）七さりともおろらはハおもひすて聞え給ハゞ

○おゞしもて（源ゐふひ）十四らぬぎならぬ身を見まうくおゞしもてんもことわりなれど（同さゝのき）万の哀をおゞしもてし

おもゝち（源繪合）十六らみさひてゐたるおもゝちけしき繪はこのきたるおもゝち（同をとめ）八おもゝちこゞらひむべ〳〵しくもてなしつゝ（同紅葉賀）二おゞ舞の足ふまおもゝちはよは見えぬさまなり（同よもきふ）十二よき車はのりておもゝちけしきゞこりらは（枕）二九はくきものめのとのをとゝそあれ云々いみゞきおもちして事を行ひどおするは補（源みもぎ）十四いとしうとくはおもゝちあゆまひおと大臣といたんはさらひ給へり（同藤のうちハ）十二けふハおもゝちおど人々しくふるまふめり

おせぐむ（宇治拾）九ノ十九さけたらくおせぐまたるものあらひゞは年五十ばりを

る（同）七八そーあゆのおせぐさまひろらりなるゲありりーらぞりおーて三十ぞり
りもりたり

おそ（源夕きり）廿わり君たちい七八人まおり給ひぬえさこの君おー給いド。みこの君
い女二宮也（同花のえん）十あろらんませおりおーつゝとりゲーまものゝねぞもーらべ
あいせてあそび給ふ（同玉かつら）十四例の舟子どもからとまりより川ドりおそゲど
いとうさふこゑの（同とこ夏）三さないとそゞーきこうらんませおりおーつゝさふ
らひ給ふ（同野分）九こうらんにもおーりゝりて見さたせバ補（散木）「かつーりのま
まのうらわのおきつとまあけのそゲ舟りらろおいあり

おぞまー（源東や）廿九このめのとこそおぞまーりりけれ（同夕きり）五十七何のおーゲ
ある身まてりをこゲまーうわりゝーきやうまいひきーのバん人ぎゝもうさてお
ぞまーかべきわざをとおゲせバ補（源浮舟）六十四けだりうよのありさまをもーるり
たあくておほーたてたる人まーあれバそこーおぞまーりるべきことをおもひよる
なりけんりー

おそき（古事記）下七強オキス

増補雅言集覽巻之卅三終